

熊本大学
永青文庫研究センター

年 報

第15号

2024

熊本大学永青文庫研究センター

はじめに

本年度も永青文庫研究センターでは、家老文書や惣庄屋文書の基礎調査、それに永青文庫細川家文書の画像データ化に取り組んだ。こうした基礎研究を継続することの意義を深く考えさせられた経験を、ここに記しておきたい。

2023年5月、当センターは、1651年に熊本藩細川家から薩摩に派遣された密偵村田門左衛門の報告書18カ条の原本を「熊本大学所蔵松井家文書」の中から発見・解読し、初期鹿児島藩政に関する多くの未知の情報が記載されていることが明らかになったことについて、記者発表を行った。詳細は本年報に発表資料を収録しているが、この文書には、島津家中の相当の高官からではないと入手できない情報ばかりが記載されていた。しかし、熊本藩の薩摩からの情報収集という大役をつとめあげた密偵村田の正体はこの時点では不明で、その究明が大きな課題として残された。

すると6月初め、筆者のもとに水俣市在住の梅下俊克氏から連絡があり、自分の先祖が代々村田門左衛門を称していたこと、先祖の事績を記した古文書が伝来していることなどが伝えられた。それらの古文書を解読検討したところ、村田家は細川家中の侍ではなく、芦北郡内に住みながら加藤清正にも仕えた、由緒ある「地侍」であったことが判明したのである。

ご先祖から梅下氏へ脈々と受け継がれてきた歴史が、専門研究と交わったところに生まれた成果である。これも、梅下氏同席のもと10月27日に記者発表し、報道を通じてひろく知られることになった。

そして、11月2日から3日間、熊大附属図書館で開催された貴重資料展には400名以上がつめかけ、門左衛門の報告書の原本を目の当たりにしたのである。

それだけではなかった。大藩どうしの微妙な交流を支えたのは、藩と藩との境界領域に根を張っていた地域住民であった。こうした歴史に触れた多くの来場者が、虫食いだらけの村田の報告書などを修理するためのクラウドファンディングに、協力を申し出た。江戸時代の「天下泰平」は幕府や大名たちだけのものではなく、地域住民の活動によっても支えられていた。そうした歴史を物語る村田の報告書原本を修理し、未来に伝える事業に協力したい——古文書史料の本質的価値が多くの来場者に共有された瞬間であった。

本センターの基礎研究は、第一に、当該の歴史資料の「本質的価値」（これは文化財保護法にも明記されている表現である）を明らかにし、第二に、それを社会的に共有することを目的に継続されてきたし、今後も継続されていかねばならないのである。

2024年2月27日

熊本大学永青文庫研究センター長
稲葉 継陽

目 次

はじめに	1
1. 年間活動記録.....	4
2. 年間活動報告.....	11
(1) 組織運営	11
(2) 研究活動	11
(3) 展覧会・講演会・社会貢献等	16
(4) センターの運営資金	19
3. 個人年間活動.....	20
4. 記者発表要旨.....	27
(1) 1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18ヵ条を発見、 初期薩摩藩政の実像が明らかに	28
(2) 1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明 ―芦北の地侍だった！―	36
5. 講演要旨.....	41
(1) 稲葉継陽 「「天下泰平」と百姓鉄炮―葦北御郡筒と地侍―」	42
(2) 今村直樹 「通潤橋の建設過程と領国地域社会―熊本藩政の特質―」.....	45

1. 年間活動記録（講演、会議、打合せ、取材等）

日付	活動内容	担当・打合せ先等
2023年4月3日	KKT収録（於花畑公園）	稲葉
4月4日	熊本県立美術館有木氏来訪	稲葉
4月6日	凸版印刷と会議（オンライン）	稲葉
	熊本県文化課豊永氏打合せ	稲葉
4月10日	NHK収録	稲葉
4月11日	熊本日日新聞連載取材（於玉名）	稲葉・後藤・鬼東（熊日）
	KKT東氏と収録打合せ	稲葉・後藤
	熊本県立美術館宮川氏打合せ	今村
4月14日	くまもと県民テレビ・てれびタ生放送出演	稲葉
4月18日	朝日新聞森北氏来訪・取材	今村
4月19日	熊本市歴史文書資料室史料調査	今村
4月20日	永青文庫常務理事林田氏来訪・打合せ	稲葉
4月21日	凸版印刷会議（オンライン）	稲葉・後藤・中原
4月21～22日	東京出張（史料調査）	今村
4月23日	八代市澤井家住宅講演	今村
4月25日	大津町歴史文化伝承館史料調査	今村・高森
	熊本日日新聞鬼東氏来訪・取材	稲葉・後藤
5月5～7日	京都出張（現地調査）	稲葉・後藤
5月9日	菊陽町野尻家史料調査	今村
5月10日	水と緑の愛護基金理事会	稲葉
	元熊日林氏来訪	稲葉
5月11日	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	稲葉
	熊本カトリック教会主催講演「小笠原玄也・加賀山隼人の娘たち」(於 熊本 YMCA 本館)	稲葉・後藤
5月12日	凸版印刷会議（オンライン）	稲葉・後藤・中原・有働(人社経理)
5月12～14日	高知出張（高知県史）	今村
5月16日	Adoiphson 教授（ケンブリッジ大学）来訪	稲葉・URA 福田、遠山・大谷理事
5月18日	記者発表「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見」	稲葉・後藤・原口（志學館大学）
5月20日	講演「織田信長文書の宝庫・熊本—その背景と現代的意味—」(於肥後の里山ギャラリー)	稲葉
5月20～21日	放送大学面接授業	今村
5月22～26日	松井家文書目録作成調査	参加人数：12人
5月23日	読売新聞若林記者来訪・取材	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
5月24日	熊本日日新聞浪床氏来訪・打合せ	稲葉
	NHK 鹿児島取材（オンライン）	稲葉・後藤
5月25日	東京大杉本科研打合せ（オンライン）	稲葉
5月26日	講演（さわやか大学大学院）	稲葉
5月31日	テレビ朝日番組収録の打合せ	稲葉
6月1日	テレビ朝日「謎解き！伝説のミステリー」収録	稲葉・後藤
	くまもと水循環・減災研究教育センター宮緑氏来訪	今村
6月2日	凸版印刷会議（オンライン）	稲葉・後藤
	熊本県立美術館宮川氏打合せ	今村
	永青文庫研究センター運営委員会打合せ	稲葉・今村
6月3日	熊本史学会春季研究発表大会	今村
6月5日	熊本日日新聞連載取材（於菊池市）	稲葉・後藤・鬼東（熊日）
6月8日	熊本県文化課丸山氏来訪・挨拶	稲葉
6月9～12日	東京出張（史料調査・明治維新史学会大会）	今村
6月13日	第1回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉
6月14～16日	東京出張（永青文庫史料調査）	稲葉・後藤
6月15日	出水神社企画展打ち合わせ	今村
6月19日	凸版印刷会議（オンライン）	稲葉・後藤
6月20日	八代市立博物館松井文庫集中調査	今村
6月21日	コロニー印刷打合せ	今村
6月24日	史料調査（葦北町湯浦）	稲葉・後藤
6月26～30日	松井家文書目録作成調査	参加人数：12人
6月27日	読売新聞池田氏来訪・挨拶	稲葉
6月29日	細川護光新理事長来訪・挨拶	稲葉
6月30日	NHK 打合せ（オンライン）	稲葉
	凸版印刷打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
7月1～2日	高知出張（高知県史）	今村
7月6日	高森町史編纂委員会（於熊本日日新聞社）	稲葉・今村
	熊本日日新聞連載取材（於宇土市）	稲葉・後藤・鬼東（熊日）
7月8日	講演「近世後期熊本藩の災害と地域社会」（於肥後の里山ギャラリー）	今村
7月14日	中川哲子デザイン室中川氏打合せ	今村
7月15日	近現代史研究会大会（オンライン）	今村
7月21日	凸版印刷打合せ（オンライン）	稲葉・後藤

日付	活動内容	担当・打合せ先等
7月22日	講演「1620年代細川家の葡萄酒製造とその背景」(於 里山ギャラリー)	後藤
7月24～28日	松井家文書目録作成調査	参加人数：16人
7月25日	中央大宮間科研打ち合わせ	今村
7月26日	菊陽町文化財保護委員会	今村
7月27日	文化財修復学会日高氏来訪	稲葉・今村
7月28日	熊本県文化財保護審議会	稲葉
7月29日	科研費研究会(オンライン)	今村・三澤・安高・胡(愛媛大)・高槻(神戸大)・高野(九州大)・深瀬(熊本県図)
8月1日	中世佐敷城委員会	稲葉
8月2日	URA 打合せ NHK 撮影	稲葉 稲葉
8月3日	甲佐陳内城委員会 中川哲子デザイン室中川氏打合せ	稲葉 今村
8月4日	多良木町相良氏遺跡委員会	稲葉
8月6日	放送大学講演	稲葉
8月7日	凸版印刷打合せ(オンライン)	稲葉・後藤
8月8日	シンポジウム打合せ(オンライン)	稲葉・林(東大)
8月9日	玉名市立歴史博物館赤堀氏来訪	今村
8月10日	産山足達家文書調査 NHK 打合せ	今村 稲葉
8月15日	熊本日日新聞連載取材	稲葉・後藤・鬼東(熊日)
8月21日	シンポジウム打合せ(オンライン) 熊本県教育庁文化課豊永氏打合せ 永青文庫理事長細川護光氏学長ご挨拶 凸版印刷打合せ(オンライン)	稲葉・林(東大) 稲葉 稲葉 稲葉・後藤
8月22～24日	文化庁による永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤・高森
8月25日	人吉城委員会 玉名市立歴史博物館赤堀氏打ち合わせ	稲葉 今村
8月26日	出水神社企画展打ち合わせ 伊津野氏来訪・打合せ	今村 稲葉
8月28日	熊本県永青文庫常設振興基金活用委員会 熊本大学同友会講演 神戸大学集中講義(～9月1日)	稲葉 稲葉 今村
8月29日	出版打合せ	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
8月31日	託麻北校区防災講座講演	稲葉
8月31～9月1日	東京出張（永青文庫史料調査）	稲葉
9月1日	出水神社企画展「熊本洋学校と肥後細川家」開催（～3日）	今村
9月2日	上記企画展ギャラリートーク（於水前寺成趣園展示館）	今村
9月3日	科研費研究会	今村・高森・三澤・安高・胡（愛媛大）・高槻（神戸大）、高野（九州大）・深瀬（熊本県図）
9月4日	凸版印刷打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
	熊本県保険医協会委員会（オンライン）	稲葉
9月4～7日	高知出張（高知県史）	今村
9月8日	熊本日日新聞連載取材（於天草市、上天草市）	稲葉・後藤・鬼束（熊日）
	熊本県立美術館宮川氏打合せ	今村
9月9～10日	大垣出張（中央大宮間科研研究会）	今村
9月9日	「豊臣秀吉サミット2023」（NHK BSプレミアム）放送	
9月11日	熊本藩研究会調査	今村・神谷（横浜開港資料館）・小関（千葉大）・白石（宮内庁）・高槻（神戸大）
	凸版印刷打合せ	稲葉・後藤
	百周年記念館打合せ	稲葉・中原
9月12日	朗読音楽劇記念企画キリシタン対談	稲葉
9月13日	天草市教育委員会来訪	稲葉
9月14日	さわやか大学校講演	今村
9月16日	シンポジウム「近世初期における「御国」と「公儀」－永青文庫細川家文書から－」（東京大学史料編纂所と共催）	稲葉・今村・後藤・林（東大）・三宅（京大）
9月27日	凸版印刷打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
9月29日	天草市棚底城整備検討委員会	稲葉
9月30日 ～10月2日	米沢出張（小関科研研究会）	今村
10月1日	出版打合せ	稲葉
10月2日	熊本日日新聞連載取材（於芦北）	稲葉・後藤・鬼束（熊日）
10月4日	「英雄たちの選択 剣豪・宮本武蔵 極める！フリーランスの道」（NHK BSプレミアム）放送	
	熊本日日新聞取材	稲葉
10月11日	凸版印刷打合せ（オンライン）	稲葉・後藤

日付	活動内容	担当・打合せ先等
10月13日	熊大通信取材	稲葉
10月13～15日	出雲市出張（島根県古代文化研究センター研究会）	今村
10月16日	RKK 撮影	稲葉・後藤
	読売新聞池田記者来訪・取材	稲葉
10月18～20日	東京出張（永青文庫史料調査）	稲葉・後藤
10月19日	永青文庫副館長有木氏来訪	今村
10月21日	清香会講演	今村
10月23～27日	松井家文書目録作成調査	参加人数：12人
10月27日	記者発表「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明－芦北の地侍だった！－」	稲葉・後藤・梅下
	NHK 取材	稲葉
10月30日	元熊日あれんじ・林氏来訪	稲葉
11月2～4日	第38回熊本大学附属図書館貴重資料展「甦る歴史資料群－修復された絵図・古文書展－」	
11月3日	第17回永青文庫セミナー（於附属図書館1階） ①「古文書修復の実践と知見の蓄積」 ②「甦る歴史資料群－近世初期細川家の「御国」と「公儀」－」	稲葉・藤井（宰匠）
11月6日	TOPPAN 打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
	NHK 取材	稲葉
11月7日	熊本日日新聞鬼東記者来訪、取材	稲葉
11月9～10日	熊本日日新聞連載取材（於南島原市）	稲葉・後藤・鬼東（熊日）・南浦（八代市博）
11月12日	玉名市立歴史博物館講演	今村
11月14日	熊本県立美術館宮川氏来訪	今村
11月18日	清香会講演	今村
11月20～22、24日	松井家文書目録作成調査	参加人数：12人
11月20日	棚底城保存活用委員会	稲葉
11月21日	さわやか大学校講演（於八代）	今村
11月24日	永青文庫林田理事来訪	稲葉
11月26日	保田窪一町内文化祭講演会	稲葉
11月27日	TOPPAN 打合せ	稲葉・後藤
	熊本県立美術館宮川氏来訪	今村
11月28～29日	愛知出張（豊田市史）	今村
11月29日	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
12月1日	熊本県立美術館宮川氏来訪・打合せ	今村・高森
12月4日	大学院先端科学研究部高橋氏来訪	今村
12月6～7日	出雲市出張（史料調査）	今村
12月6日	NHK取材	稲葉
12月9日	福岡出張、出版打合せ	稲葉
	熊本史学会秋季研究発表大会報告	今村
12月11～12日	東京出張、番組収録	稲葉
12月13～15日	文化庁による永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤・高森
12月16日	清香会講演	稲葉
12月18日	トータルメディア打合せ	稲葉
12月19日	読売新聞沖村氏電話取材	稲葉
12月20日	TOPPAN打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
12月21～22日	NHK撮影	稲葉・後藤
12月21～22日	地震予知研・水野氏史料調査	今村
12月22日	高知県史（オンライン）	今村
12月26日	熊本県文化企画課内田氏打合せ	稲葉
	熊本県立図書館丸山氏来訪	稲葉
12月26～28日	高知出張（高知県史）	今村
2024年1月5日	永青文庫林田理事、有木副館長来訪	稲葉・今村
	文化財保護協会高木氏来訪	稲葉
	熊本県立美術館「土方歳三資料館×肥後熊本藩」展（特別協力）、開会式出席	稲葉・今村
1月15日	熊本日新聞連載取材（於熊本市）	稲葉・後藤・鬼東（熊日）
1月19日	コロニー印刷室原氏打合せ	今村
1月20日	清香会講演	後藤
	宮内庁書陵部白石氏来訪	今村
1月22～26日	松井家文書目録作成調査	参加人数：12人
1月26日	吉川弘文館編集会議（オンライン）	今村
1月29日	TOPPAN打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
1月30日	熊本県立美術館収集委員会	今村
2月1日	玉名市立博物館赤堀氏来訪	今村
2月2～4日	浜田市出張（島根県古代文化研究センター研究会）	今村
2月5日	中世宇土城跡整備検討委員会	稲葉
2月6日	公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事会出席	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
2月7日	高知県史（オンライン）	今村
2月9日	古閑家訪問	今村・高森
2月10日	京都女子大中村氏来訪、御船町巡見	今村・大津山（山都町）・宮川（熊本県美）
2月12日	講演「通潤橋の建設過程と領国地域社会－熊本藩政の特質－」（熊本市、KKR ホテル熊本）	今村
2月14日	熊本県文化財保護協会主催講演 宇土市轟泉水道及び高月邸保存活用検討会 「英雄たちの選択 赤穂浪士・最期の49日」放送（NHK BS） 熊本博物館木山氏打合わせ	稲葉・後藤 今村 今村・三澤
2月15日	史料調査（於水俣市、芦北町）	稲葉・後藤
2月15～17日	東京出張（史料調査）	今村
2月17日	清香会講演	稲葉
2月19～21日	地震予知研調査	稲葉・今村
2月20日	熊本市歴史文書資料室上村氏打合せ	今村
2月21日	読売新聞池田支局長来訪・取材	稲葉
2月23日	多良木相良氏関係史跡シンポジウム講演	稲葉
2月26～3月1日	松井家文書目録作成調査	参加人数：10人
2月29日	佐敷中世城調査委員会	稲葉
3月3日	くまもと県民交流館パレア 記念講演会「細川キリシタン群像」	稲葉
3月3～6日	東京出張、史料調査・出版打合せ	稲葉・後藤
3月5日	科研費研究会（オンライン）	今村・高森
3月7日	全日空地方文化紹介番組撮影	稲葉
3月8日	人吉城整備検討委員会	稲葉
3月10～11日	千葉出張（千葉大小関科研研究会報告）	今村
3月11日	毎日新聞反田記者取材	稲葉
3月16日	シンポジウム「地域社会史の視座から考える旧藩社会」（中央大宮間科研研究会と共催）	今村・高森・三澤
3月18日	大分先哲叢書編纂委員会	稲葉
3月20～22日	高知出張（高知県史）	今村
3月25日	宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会	今村
3月26～28日	東京出張（永青文庫理事会出席、出版打合せ）	稲葉
3月30日	国際ロータリー 2023～2024年度 熊本第三グループ合同講演会	稲葉

2. 年間活動報告

(1) 組織運営

本年度の運営は、主として専任教員の稲葉継陽教授、今村直樹准教授が担い、兼務教員として三澤純教授、安高啓明准教授がこれに協力した。また後藤典子特別研究員が研究・社会発信業務を専任教員と分担し、科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者・今村）等によって雇用されている技術補佐員、大学院生および学部学生らも、史料のデータ化等の実務にたずさわった。

永青文庫研究センター運営委員会を通じての運営は、おおむね円滑に進められた。

なお、2023年8月28日に熊本県庁で開催された永青文庫常設展示基金活用委員会にて2023年度の事業計画を報告し、あわせて中間報告を行い、承認された。

(2) 研究活動

1) 永青文庫細川家文書の画像データ蓄積と分析

本年度も例年と同様、永青文庫細川家文書の藩政史料について、新たなデータの蓄積を行った。

撮影を実施したのは、近世中後期の刑事法制担当部局（刑法方）による年次記録帳簿群「口書」8冊分（画像約1万3,000枚）である。撮影された画像データは、熊本大学附属図書館貴重資料展などに活用されるとともに、下記の共同研究推進のための素材として分析が深められる予定である。

2) 細川家文書「口書」の細目録作成と共同研究

熊本藩刑法方の年次記録帳簿群である「口書」には、藩領で発生した犯罪・紛争などの被疑者や関係者の供述書と、刑罰の決裁過程に係る文書が収録されている。18世紀前半の正徳2年（1712）から幕末期の慶応3年（1867）まで、全131冊が現存している。1冊あたりの総丁数が2000丁を超え、収録事件数が150件以上におよぶものも多い。「口書」に収録された供述書は基本的に庶民層のもので、藩の下級役人や村役人なども含まれている。

2023年度、上記「口書」の研究により近世民衆史研究の新展開を目指す研究課題「永青文庫細川家文書『口書』の総合的解析による日本近世民衆史の研究」（研究代表者・今村直樹）が、科学研究費補助金基盤研究（B）に採択された。それを受けて本センターは、①「口書」収録事件の細目録作成、②収録事件の分析に基づく共同研究、に着手した。

①の作業には、科研費で雇用された高森荘子が主に従事し、計7冊分、483件分の細目録を作成することができた。その過程で確認された幕末期の新選組関係史料については、細川コレクション特別展「土方歳三資料館×肥後熊本藩」（後掲）に出陳した。②では、民衆運動・村落史、流通・経済史、法制史、障害史・女性史などの専門家を集め、打ち合わせを2023年7月29日に行うとともに、研究会を(1)同9月3日、(2)2024年3月5日の2回開催した。報告題目は以下の通りである。

- (1) 2023年9月3日 於熊本大学文法学部本館
三澤純（熊本大学大学院人文社会科学研究所）
「久木野一乱」考
今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）
近世後期の村落共同体と秩序—細川家文書「口書」を素材に—
- (2) 2024年3月5日 オンライン
高槻泰郎（神戸大学経済経営研究所）
文政11-12年大坂買米一件に関する考察

3) TOPPAN 株式会社フロンティア事業開発センター事業開発本部研究企画部データベース 開発チームとの共同研究によるプロジェクト「永青文庫資料と「くずし字 AI-OCR」の活用 による17世紀社会論・公儀権力形成史の再構築」のスタート

本プロジェクトは、稲葉継陽を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（C）によって本年度から開始され、①歴大な文献史料をいかに効率的に把握し活用するか、②世界史の近世化という大変動期にあたる17世紀の社会状況をどう実態的に把握するかという、日本史研究の積年の二つの課題に正面から取り組むものである。

具体的には、熊本大学に寄託されている永青文庫細川家資料に元和7年（1621）以降18世紀初期まで280冊52,000丁もある細川家奉行所の日報および関連する記録史料を、TOPPAN 株式会社が開発した「くずし字 AI-OCR システム ふみのは」によってテキストデータ化する。その上で、「惣庄屋／迷惑／損／大雨／洪水／旱／虫／凶／飢／疫」などのキーワードを、TOPPAN が構築する検索エンジンによって検出し、当該期中部九州地域における天候災害に起因する飢饉と民衆生活への藩側の対応ぶりを把握・究明し、幕藩体制確立期の社会状況の再把握を目指すとともに、その成果を「くずし字 AI-OCR」を活用した研究モデルケースとしても提示する計画である。

本年度は、「ふみのは」が読み込んで制作された当該史料のサンプルテキストデータを、研究協力者の後藤典子（本センター特別研究員）が校閲し、同システムの解読確度の一定の向上を実現した。数万紙にも及ぶ古文書画像データを人力でテキストデータ化する作業などせずとも、「くずし字 AI-OCR」でいくつものキーワードを画像データから直接抽出することができる。そんな未来もすぐそこにある。

4) 松本寿三郎氏収集文書の目録作成と画像データ蓄積

松本寿三郎氏収集文書（以下、「松本家文書」と略記）は、元熊本大学教授である同氏が、長年にわたり私費を投じて収集した、近世・近代の熊本藩（県）関係資料を主とする史料群である。古文書、古書、絵図などから構成されており、「肥後国誌」や「御刑法草書」といった貴重史料も多く含まれている。2017年度、松本氏から熊本大学文学部日本史学研究室に寄贈されたが、その全体像は不明であり、利用環境の整備が求められていた。

そこで、本センターは2023年度から、①松本家文書の総合調査、②同文書の画像データ蓄積に着手した。①では、大学院社会文化科学教育部及び文学部の学生が目録作成に従事し、約

1,000点の目録を作成することができた。これは、原秩序が確認できる史料群（合志郡柳水村上田家文書・八代郡種山手永関係文書）を除く、松本家文書のほぼ全体にあたる。また、目録調書のデータ化作業も併せて進め、本年度は約400点の調書データの入力を完了した。

②では、熊本大学キャンパスミュージアムのデジタルアーカイブズ事業の一環として、松本家文書の画像約5,500枚を撮影することができた。これらの画像データは、近い将来、本センターHPにて公開される予定である。

5) 熊本大学所蔵松井家文書の目録作成・修復作業

熊本大学附属図書館には、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書・古記録（松井家文書）約36,000点が保管されている。本センターは2018年度から、松井家文書の目録作成事業に着手している。

目録作成事業では、センタースタッフのほか学外からの作業従事者も得て、附属図書館で一週間単位の集中調査を7回開催した（総日数29日、延べ人数86人）。その結果、1,521点の目録を作成することができた。併せて目録調書のデータ化作業も進め、本年度は約2,000点の調書データの入力を完了した。

松井家文書の基礎研究に基づく成果は、プレスリリース「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見」（後掲）などに反映されている。

6) 古閑家文書の目録作成

古閑家文書（古閑孝氏所蔵）は、総点数が20,000万点をこえる熊本藩惣庄屋史料の代表的存在である。2016年4月熊本地震の被災後、熊本被災史料レスキューネットワークにより救出され、現在は熊本大学で保管されている。

本センターでは、2019年度から古閑家文書の総合調査を進めてきた。本年度は、近代の新聞資料の整理作業を重点的に行い、近代文書約1,800点の目録が整うに至った。来年度以降、近世・近代の未整理文書の調査に着手する予定である。

7) 東京大学所蔵上田家文書の研究資源化と共同研究

東京大学史料編纂所が所蔵する上田家文書は、主に幕末期の熊本藩京都留守居として活躍した上田久兵衛（休）の関係史料からなる。上田家文書は、既に幕末の京都政局に関わる主要史料が活字化されているが（宮地正人編『幕末京都の政局と朝廷』名著刊行会、2002年）、その全体像は不明であり、利用環境の整備と研究の深化が求められていた。

2023年度、「史料編纂所所蔵『熊本藩京都留守居上田久兵衛関係資料』の研究資源化」（研究代表者・今村直樹）が東京大学史料編纂所一般共同研究に採択された。これを受けて今村は、宮内庁書陵部の白石烈氏とともに、上田家文書の総目録作成と画像データ蓄積の作業を進めた。2024年度には、得られた知見を発信するシンポジウムの開催を予定している。

本年度の作業により、将来的な上田家文書の利活用に向けた環境整備が進むとともに、新選組が登場する上田久兵衛の日記が細川コレクション特別展「土方歳三資料館×肥後熊本藩」（後掲）に出陳され、社会貢献の面でも一定の成果を得た。

8) シンポジウム「近世初期における「御国」と「公儀」—永青文庫細川家文書から—」の開催

本シンポジウムは2023年9月16日(土)、熊本大学永青文庫研究センター・東京大学史料編纂所主催、JSPS 科学研究費補助金基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築—基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」、同基盤研究(C)「永青文庫資料と「くずし字 AI-OCR」の活用による17世紀社会論・公儀権力形成史の再構築」、同若手研究「日本近世における政教関係の形成と確立」、および熊本史学会の共催により、熊本大学工学部百周年記念館にて開催された。

公益財団法人永青文庫が所蔵し、熊本大学附属図書館に寄託されている細川家文書は、織田信長発給文書59通や全国的に屈指の規模を誇る近世藩政史料をはじめ、中世から近世にかけての長期にわたり、かつ内容的にも多岐にわたる、貴重な史料群である。東京大学史料編纂所では『大日本近世史料』というシリーズで近世初期の細川家文書の史料集を継続刊行し、近世初期の政治史研究において様々に活用されてきた。また、同じく主催者である熊本大学永青文庫研究センターでは、熊本大学附属図書館寄託分の悉皆調査と総目録を作成し、約58,000点に及ぶ全体像を明らかにし、かつ「永青文庫叢書」で10冊の史料集を刊行し、これまで知られてこなかった新史料を含め、興味深く重要な史料を広く学会に提供してきた。このような、着実な調査の実施と研究の基礎・基盤となる史料集の刊行によって、研究環境の充実が着実に進んできた状況にある。

今回のシンポジウムは、こうした取り組みのなかで蓄積されてきた知見をもとに、近世初期の領国支配や幕府・諸大名との関係を検討し、「永青文庫細川家文書」の豊かな世界とそこから明らかになる研究成果とを広く発信して、今後の熊本藩研究や近世政治史研究をより前進させていくために企画・開催された。シンポジウムの構成は、「永青文庫細川家文書」の史料を検討した研究報告2本とコメント、そして報告者からのコメントへのリプライと参加者・報告者間の質疑応答とした。会場参加と zoom ミーティングによるオンライン参加とを併用したハイブリッド開催であった。

会場での対面参加者・オンラインでの参加者合わせて150名弱もの参加者を得ることができたうえに、発表者どうしの活発な議論や多くの質疑が重ねられた。

プログラム 13:00-17:00

開会の挨拶／ご案内

<報告> 林晃弘(東京大学史料編纂所)

「細川忠利の『公儀御書案文』と近世政治史研究」

<報告> 稲葉継陽(熊本大学永青文庫研究センター)

「元和～寛永期における「御国」統治と文書・記録—ポスト戦国世代の領国支配—」

<コメント> 三宅正浩(京都大学文学研究科)

質疑応答

閉会の挨拶

9) シンポジウム「地域社会史の視座から考える旧藩社会」の開催

本シンポジウムは、中央大学宮間純一氏の科研プロジェクトおよび本センターの主催により、

2024年3月16日に熊本大学文法学部本館で開催された。近年明らかにされつつある廃藩後の旧熊本藩主細川家と旧藩士・旧領民との関係などが報告され、地域社会史の視座から、「旧藩社会」をとらえ直すことを目指した。詳細は以下の通りである。

本シンポジウムには、対面参加者・オンラインでの参加者を合わせて約70名が参加し、「旧藩社会」の定義や旧藩主家と旧領民の関係などをめぐって活発な議論が交わされた。

趣旨文

近年、近代日本の「旧藩社会」（大名華族・旧藩士・旧領民とその子孫らによる社会関係の総体）をめぐる研究が活発化している。この分野の研究が進められる中で、大名華族家の家政のありさまや、同郷会・育英会の活動実態などが明らかにされてきた。一方で、近世・近代の地域社会史研究の蓄積との架橋が十分になされていないという課題もある。具体的には、近世の藩研究（藩社会論、藩地域論、藩世界論）との断絶、近代の地方行政と旧藩社会の関係性の不明瞭さなどが指摘できる。

上記の問題意識から今後の研究進展のために本シンポジウムを開催する。

プログラム 13:00-17:00

趣旨説明

<報告>宮間純一（中央大学文学部）

「<生存>のための旧藩社会—旧松代藩・旧大垣藩を事例に—」

<報告>今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）

「明治10年代の旧藩主家と地域社会—旧熊本藩を事例に—」

<報告>平下義記（広島経済大学経済学部）

「『包摂』型旧藩社会と寄付行為—主として旧福山藩の義倉社を通じて見た—」

討論

10) 紀要『永青文庫研究』第7号の刊行

本センターは、2017年度から研究紀要『永青文庫研究』を刊行している。本年度の第7号には、永青文庫研究センタースタッフ及び学外の研究者からの寄稿により、2023年3月に開催したシンポジウム「道と川の近世領国地域社会」の特集とともに、論文1本、研究ノート1本、書評1本を掲載することができた。

第7号の目次は以下の通りである。

特集 道と川の近世領国地域社会

特集にあたって 今村 直樹

論文

往還と舟運による地域運営

— 〘中道橋、保存のための覚書を兼ねて— 三澤 純

近世後期藩領国の用水管理と地域社会

—熊本藩領の馬場楠井手を事例に— 今村 直樹

コメント 久留島 浩

コメント 矢野健太郎

論文

禁教下の潜伏宣教を支援したキリシタン牢人

—「伴天連宿主」加賀山左太夫ベントと細川家キリシタン家臣—

..... 竹山 瞬太

研究ノート

八代松井家の知行地支配 林 千寿

書評

熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』

..... 菊池 勇夫

11) 稲葉継陽『近世領国社会形成史論』（吉川弘文館、2024年3月）の刊行

近世大名領国支配の体系＝藩政が確立する過程（16-17世紀）を百姓支配・地域支配の観点から明確化するという目標のもと、『近世領国社会形成史論』（下記）をまとめ、刊行した。2022年までに発表した論文12本をもって、第Ⅰ部「領国社会の形成」、第Ⅱ部「統治の展開」の2部に編集し、冒頭に「領国社会形成史序説」を書き下ろして、研究史上への本書の位置づけを示した。

具体的には、戦国期の自治的な村共同体が近世大名領国の展開をどう決定づけたのか。主に熊本藩細川家を例に、百姓身分の特質、村請制、城割、中間行政機構、境目地域、郡奉行の行政権、諫言、「御国家」などを論点に追究した。大名領国の経済的土台から法的・観念的上部構造までを総体として把握し、幕藩関係の画期とされる寛永飢饉期を地域社会の側から捉え直そうと試みている。

12) 永青文庫細川家資料の重要文化財指定に向けた集中調査

本センターは、熊本大学寄託永青文庫細川家資料（約5万8,800点）の総目録を2015年に刊行した。このうち、『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』（吉川弘文館、2010年）で紹介された信長発給文書をはじめとする中世文書266通は、2013年6月に国の重要文化財に指定された。しかし、それを除いた資料群の大部分は未指定である。そのため、近い将来の重要文化財指定に向けた永青文庫資料の集中調査（総目録と原資料との照合作業）が、文化庁の指導のもと、2022年度から始められた。

本年度の集中調査は、2023年8月（22日～24日）と同12月（13日～15日）の2度開催された。文化庁、公益財団法人永青文庫、熊本県文化課などの関係者が参加し、総目録の約5,000点分について、原資料との照合作業を終えることができた。

(3) 展覧会・講演会・社会貢献等

- 1) 第38回 熊本大学附属図書館貴重資料展「甦る歴史資料群—修復された絵図・古文書展—」
(2022年11月2～4日、附属図書館と共催 於熊本大学附属図書館)

2) 第17回 永青文庫セミナー

(2021年11月3日、附属図書館と共催 於熊本大学附属図書館)

講演1 藤井良昭 (修理工房宰匠株式会社代表取締役)

「古文書修復の実践と知見の蓄積」

講演2 稲葉継陽 (熊本大学永青文庫研究センター長)

「甦る歴史資料群—近世初期細川家の「御国」と「公儀」—」

熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター共催で11月2日から4日まで、第38回貴重資料展「甦る歴史資料群—修復された絵図・古文書展—」を熊本大学附属図書館中央館で開催した。

今回の貴重資料展は、直近5年間に一流の職人たちの手によって甦った貴重資料を中心に38点を公開した。近世初期の名古屋城や駿府城の普請現場における加藤家・細川家の役割や、細川忠興・忠利の人物像、キリシタン禁圧や原城落城後の状況を生々しく語る文書・絵図の数々。さらには鹿児島藩に派遣された密偵の報告書や、大名領を越えて移住する百姓たちの姿、熊本藩政の実像を示すバラエティーに富んだ諸史料など、多くの初公開資料を展示・公開した。

展示のプランニングと解説目録の執筆には、本センターの稲葉継陽、後藤典子があたった。

期間中には、本センターから稲葉の講演を提供するとともに、貴重資料の修復を手掛けられた修理工房宰匠株式会社の藤井良昭代表取締役による公開講演会「第17回永青文庫セミナー」も開催し、学内外から熱心な聴講者が参加した。

貴重資料展には、卒業生や一般市民を含む413名が、公開講演会には136名が訪れ、いずれも盛況であった。

3) 企画展「熊本洋学校と肥後細川家」の開催 (2023年9月1日～9月3日、於水前寺成趣園展示館、出水神社主催、本センター共催)

熊本洋学校教師ジェーンズ邸は、明治4年、熊本藩が招いたアメリカ人教師のために建てられた洋館である。2016年4月の熊本地震で倒壊したが、その後再建され、2023年9月1日から公開が再開されることとなった。

ジェーンズ邸公開を記念して開催された本企画展では、熊本洋学校の設立事情や廃藩置県後の細川家との関係を示す古文書や古写真を、全6枚のパネルで紹介した。また、パネルを監修した今村によるギャラリートークを9月2日に開催した。

4) 企画展「国指定史跡高瀬米蔵跡展 御蔵をめぐる人びと」への企画協力 (2023年10月21日～2024年1月8日、玉名市立歴史博物館こころピア主催)

2022年11月、玉名市にある高瀬船着場跡、高瀬御蔵跡、晒船着場跡が「熊本藩高瀬米蔵跡」として、国の史跡に指定された。いずれも菊池川流域の年貢米(高瀬米)を集積し、「天下の台所」大坂へ搬出した熊本藩の重要拠点であり、大坂米市場で最優良とされた高瀬米は、まさに藩財政の命運を握る存在であった。

国史跡指定を記念して開催された本企画展では、永青文庫細川家文書などの古文書を中心に、廻船の模型や絵図など約90点が展示された。本センターも企画立案に助言を行い、松本寿三郎

氏収集文書における高瀬米蔵関係史料4点が出陳されることとなった。また、11月12日に玉名市民会館で開催された講演会では、高槻泰郎氏（神戸大学）と今村が講師を務めた。

本展は、熊本日日新聞社等のメディアで紹介されるとともに、1,106人の来場者があった。

5) 細川コレクション特別展「土方歳三資料館×肥後熊本藩」への特別協力（2024年1月10日～3月24日、熊本県立美術館主催）

本企画展は、土方歳三資料館（東京都日野市）の所蔵品を多く展示するとともに、熊本藩が記録した新選組の姿を細川家文書から明らかにするものである。幕末の京都で治安維持活動に従事した新選組は、会津藩預かりの組織であったが、当時、会津藩と熊本藩は政治的に協力関係にあったため、細川家文書にも新選組関係の記述が多く残されることとなった。細川家文書「口書」や上田久兵衛の日記（東京大学所蔵上田家文書）も出陳されている。

本センターは、図録における史料解説やコラムの執筆、翻刻文の校正などで協力を行った。本企画展は、熊本日日新聞社等のメディアで紹介されるとともに、2024年3月10日時点で約10,000人の来場者があった。

6) 熊本大学広報戦略室を通じた研究成果の記者発表

本センターは最新の研究成果を発信する手段として、熊本大学広報戦略室を通じたマスコミへの公式発表と熊本大学HPへの掲載、対面での記者発表を実施している。本年度は、以下の2件を発表することができた。

- ①「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見、初期薩摩藩政の実像が明らかに」（2023年5月10日）
- ②「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明―芦北の地侍だった！―」（2023年10月27日）

①と②の発表内容は本年報の巻末に収録しているが、いずれも全国各紙や熊本・鹿児島テレビ、それにWEBニュースで報道され、大きな反響を呼んだ。

特筆すべきは、①の記者発表への鹿児島大学名誉教授原口泉氏の同席、同じく②への村田門左衛門ご子孫で史料提供者でもある梅下俊克氏の同席が実現したことである。史料研究の内容を他大学の研究者と共有し学術的価値を確定した上で発信し、なお残された課題が市民からの情報提供によってクリアされ、それを再度発信するという、記者発表を通じた研究の深化・社会化を経験することができた。

本センターの基礎研究によって得られた新発見、新知見を社会一般に周知する上で有効な手段として、今後も取り組みを続けていきたい。

7) テレビ企画、地元紙への執筆等、マスコミとの連携

NHK BSで放送される「英雄たちの選択」、地元紙『熊本日日新聞』への寄稿や連載などを通じて、本センターの基礎研究の成果を随時発信した。今後も取り組みを継続したい。

(4) センターの運営資金

本年度の永青文庫研究センターの運営資金は、主に以下の事業費等によった。

- ① 熊本大学 概算要求機能強化促進分プロジェクト経費「熊本藩大名家資料群の総合的分析による日本近世史研究拠点・歴史文化情報発信拠点の発展」
- ② 日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究（B）
- ③ 日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究（C）
- ④ 熊本県永青文庫常設展示振興基金

3. 個人年間活動

稲葉継陽

著書

稲葉継陽『近世領国社会形成史論』（吉川弘文館、2024年2月、全414頁）

論文

稲葉継陽「室町期守護菊池氏の権力とその拠点」（『熊本史学』103、2023年8月、27-49頁）

稲葉継陽「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」（『多良木相良氏関連遺跡総合調査報告書』多良木町教育委員会、2024年3月）

学会発表

2023年9月16日 熊本大学永青文庫研究センター・東京大学史料編纂所主催シンポジウム「近世初期における「御国」と「公儀」—永青文庫細川家文書から—」
発表タイトル：「元和～寛永期における「御国」統治と文書・記録—ポスト戦国世代の領国支配—」

学術的著述

（書評）

稲葉継陽「書評 熱田順著『中世後期の村落自治形成と権力』（『史学雑誌』132-3、2024年4月、57-67頁）

（展覧会解説目録）

稲葉継陽・後藤典子『第38回 熊本大学附属図書館貴重資料展 甦る歴史資料群—修復された絵図と古文書展—解説目録』（全27頁）

（雑誌連載）

稲葉継陽「永青文庫 歴史万華鏡」（97）～（108）（『阿蘇』1092-1103号、2023年4月-2024年3月）

（新聞連載）

稲葉継陽「細川キリシタン群像」（4）～（15）（『熊本日日新聞』2023年4月-2024年3月）

開催セミナー、シンポジウム、展覧会

2023年9月16日 近世初期における「御国」と「公儀」—永青文庫細川家文書から—
主催：熊本大学永青文庫研究センター・東京大学史料編纂所

2023年11月2～4日 第38回 熊本大学附属図書館貴重資料展「甦る歴史資料群—修復された絵図と古文書展—」
主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

2023年11月3日 第17回永青文庫セミナー
主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

その他（受賞、外部委員、社会貢献等）

（外部委員）

人吉市指定文化財等保存活用専門会議（人吉城跡部会）専門指導員、佐敷城跡調査検討委員会（芦北町）、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員（菊池市）、国史跡棚底城跡整

備検討委員（天草市）、高森町史執筆委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事、永青文庫常設展示振興基金運営委員（熊本県教育庁文化課）、熊本県文化財保護審議委員、熊本県文化振興審議会委員、放送大学熊本学習センター客員教授

（一般書の監修）

稲葉継陽監修『図説 日本の城と城下町⑨ 熊本城』（創元社、2024年1月、全160頁）

（講演）

- 2023年5月11日 朗読劇「小笠原玄也一家の十五人」制作実行委員会主催勉強会
タイトル「細川家キリシタン家臣加賀山隼人と小笠原玄也」（後藤典子との共同講演）
- 2023年5月20日 里山ギャラリー講座 永青文庫研究の最前線
タイトル「織田信長文書の宝庫・熊本—その背景と現代的意味—」
- 2023年5月26日 熊本さわやか大学校大学院 講演会
タイトル「新発見史料からみる宮本武蔵—その思想と役割—」
- 2023年7月10日 第53回九州地区大学保健管理研究協議会
タイトル「細川藩政における公共福祉行政の萌芽とその担い手」（オンデマンドで7月30日まで公開）
- 2023年8月6日 2023年度第4回 放送大学熊本学習センター公開講演会
タイトル「江戸時代における戦争と平和—肥後国葦北郡の百姓鉄炮をめぐって—」
- 2023年8月28日 熊大同友会総会・講演会
タイトル「武蔵、孤高にあらざ—熊大の新発見史料からみる宮本武蔵の実像—」
- 2023年11月3日 第17回永青文庫セミナー（熊本大学附属図書館・永青文庫研究センター主催）
タイトル「甦る歴史資料群—近世初期細川家の「御国」と「公儀」—」
- 2023年11月26日 西原一町内文化祭 保田窪公民館10周年記念講演会
タイトル「保田窪の誕生」
- 2023年11月23日 第30回 清香会生涯学習講座
タイトル「織田信長文書の宝庫・熊本—その背景と現代的意味—」
- 2024年2月14日 2023年度 第9回文化財研修会（熊本県文化財保護協会主催）
タイトル「「天下泰平」と百姓鉄炮—葦北御郡筒と地侍—」
- 2024年2月17日 第30回 清香会生涯学習講座
タイトル「「天下泰平」と百姓鉄炮—葦北御郡筒と地侍—」
- 2024年2月24日 「中世武士団多良木相良氏の痕跡」講演会・現地説明会（多良木町教育委員会主催）
タイトル「中世武士団 多良木相良氏について」
- 2024年3月3日 パレアの日 2024熊本県民交流館パレア 記念講演会「もっと知りたい熊本の歴史」

タイトル「細川キリシタン群像」

2024年3月30日 国際ロータリー第2720地区 2023～2024年度 熊本第三グループ合同 IM
タイトル「永青文庫細川家文書が示す日本史上の論点」

(記者発表)

2023年5月18日 「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見、初期薩摩藩政の実像が明らかに」

2023年10月18日 「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明—芦北の地侍だった！—」

(演劇脚本の歴史考証)

朗読音楽劇「高麗門秘話 小笠原玄也一家の15人 細川藩キリシタン武士の殉教」(2023年11月2日、熊本県立劇場演劇ホールにて公演)

(主なテレビ出演)

2023年4月14日 「てれびタ」(くまもと県民テレビ、生放送)

2023年9月9日 「豊臣秀吉サミット2023」(NHK BS プレミアム、BS 4K)

2023年10月4日 「英雄たちの選択 剣豪・宮本武蔵 極める!フリーランスの道」(NHK BS プレミアム、BS 4K)

2024年2月14日 「英雄たちの選択 赤穂浪士・最期の49日」(NHK BS プレミアム、BS 4K)

今村直樹

各種委員会

熊本県立美術館収集委員会委員、宇土市轟泉水道及び旧高月邸保存活用検討会委員、宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会委員、菊陽町文化財保護委員、高森町史編纂委員、高知県史編さん専門部会(近世部会)委員、新修豊田市史編さん委員会執筆協力員、鳥根県古代文化センター客員研究員、伊豆の国市史跡等整備調査委員会委員、神戸大学大学院人文学研究科非常勤講師、放送大学非常勤講師

論文

- ・「近世地域社会史からみた通潤橋・通潤用水の歴史的的位置」(『重要文化財 通潤橋総合調査報告書』山都町教育委員会、2023年5月、181-190頁)
- ・「明治零年代の士族反乱と旧藩主家・旧藩士族—佐賀の乱・神風連の乱における旧熊本藩を事例に—」(『日本史研究』731、2023年7月、1-27頁)
- ・「近世後期藩領国の用水管理と地域社会—熊本藩領の馬場楠井手を事例に—」(『永青文庫研究』7、2024年3月、27-45頁)
- ・「幕末維新时期熊本藩の茶生産と地域社会」(『グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究〔アジア研究・別冊〕』、2024年3月刊行予定)

学術的著述

(シンポジウム趣旨説明)

- ・「特集にあたって」(『永青文庫研究』7、2024年3月、1-2頁)

(コラム)

- ・「秋月悌次郎と熊本」(宮川聖子編『細川コレクション展 土方歳三資料館×肥後熊本藩』土方歳三資料館展実行委員会、2024年1月、103-104頁)

(作品解説)

- ・「口書」(同上宮川編『細川コレクション展 土方歳三資料館×肥後熊本藩』、103-104頁)

(史料解説)

- ・「史料から読み解く江藤家」(『国指定重要文化財 江藤家住宅』大津町教育委員会、2024年3月、11頁)

(自治体史)

- ・新修豊田市史編さん専門委員会編『新修豊田市史 別編 総集編』(愛知県豊田市、2023年、136-137、159-161、228、299-300、384頁)

(新聞寄稿)

- ・「歴史の記録保全重要 寄稿「通潤橋」国宝指定へ」(『熊本日日新聞』2023年7月20日)

パネル展、シンポジウム

2023年9月1～3日 出水神社企画展「熊本洋学校と肥後細川家」

主催：水前寺活性化プロジェクトチーム・出水神社

共催：熊本大学永青文庫研究センター

2024年3月16日 地域社会史の視座から考える旧藩社会

主催：熊本大学永青文庫研究センター・「地域社会史の視座に立った旧藩社会の総合的研究—「旧藩地域社会論」—をめざして」(JSPS 科研費21H00571、研究代表者：宮間純一)

研究発表

2023年9月3日 「口書」科研費研究会 熊本大学文法学部本館

タイトル「近世後期の村落共同体と秩序」

2023年12月9日 熊本史学会秋季研究発表大会 くまもと県民交流館パレア

タイトル「旧熊本藩主細川護久と西南戦争」

2024年3月10日 「富国論」科研費研究会 GAKUYA Bird 店

タイトル「幕末維新时期熊本藩の『上書』」

2024年3月16日 シンポジウム「地域社会史の視座から考える旧藩社会」熊本大学文法学部本館

タイトル「明治10年代の旧藩主家と地域社会—旧熊本藩を事例に—」

講演等

(講演)

2023年4月23日 生涯学習館・寺子屋「西小路」(八代市)記念講演会

タイトル「澤井家と松井家家臣団について」

2023年7月8日 里山ギャラリー「永青文庫研究の最前線」肥後銀行本店ビル

タイトル「近世後期熊本藩の災害と地域社会」

2023年9月14日 熊本さわやか大学校 熊本県総合福祉センター

- タイトル「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」
- 2023年10月21日 清香会生涯学習講座「日本の至宝—『永青文庫に学ぶ』」清香館（熊本県立第一高等学校）
- タイトル「熊本城と細川家の明治維新一永青文庫資料の伝来過程」
- 2023年11月12日 玉名市立歴史博物館ころろピア「国指定史跡熊本藩高瀬米蔵跡展」講演会 玉名市民会館
- タイトル「熊本藩政と年貢米—近世中後期を中心に—」
- 2023年11月18日 清香会生涯学習講座「日本の至宝—『永青文庫に学ぶ』」清香館（熊本県立第一高等学校）
- タイトル「細川重賢と宝暦の改革」
- 2023年11月21日 熊本さわやか大学校 桜十字ホールやつしろ
- タイトル「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」
- 2024年2月12日 国宝になった「通潤橋」ものがたり KKR ホテル熊本
- タイトル「通潤橋の建設過程と領国地域社会—熊本藩政の特質—」
- (ギャラリートーク)
- 2023年9月2日 出水神社企画展ギャラリートーク 水前寺成趣園展示館
- タイトル「熊本洋学校と肥後細川家」
- (古文書講座)
- 2023年度毎月第1・第3月曜日 「古文書を読む」熊日生涯学習プラザカルチャー講座 びふれす熊日会館（熊本市中央区）

後藤典子

学術的著述

(展覧会解説目録)

稲葉継陽・後藤典子『第38回 熊本大学附属図書館貴重資料展 甦る歴史資料群—修復された絵図と古文書展— 解説目録』（全27頁）

社会貢献

(講演)

- 2023年5月11日 朗読劇「小笠原玄也一家の十五人」制作実行委員会主催勉強会
タイトル「細川家キリシタン家臣加賀山隼人と小笠原玄也」（稲葉継陽との共同講演）
- 2023年7月22日 里山ギャラリー講座 永青文庫研究の最前線
タイトル「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」
- 2023年1月20日 第30回 清香会生涯学習講座
タイトル「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」

(記者発表)

- 2023年5月18日 「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見、初期薩摩藩政の実像が明らかに」

2023年10月18日 「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明—芦北の地侍
だった!—」

(演劇脚本の歴史考証)

朗読音楽劇「高麗門秘話 小笠原玄也一家の15人 細川藩キリシタン武士の殉教」(2023年11
月2日、熊本県立劇場演劇ホールにて公演)

日高愛子

研究発表

- ・「近世女子用往来物にみる七夕歌」東アジア日本研究者協議会第7回国際学術大会、2023年
11月5日、東京外国語大学
- ・「細川就の蒐書をめぐって」第70回古典研究会、2023年12月23日、福岡大学

三澤 純

各種委員会

熊本市町界町名審議会委員長、くまもと文学・歴史館協議会委員、御船町文化財保護委員

論文

- ・「熊本藩の在中瓦葺禁止令と江藤家住宅」、熊本大学大学院人文社会科学研究部(文学系)
『人文科学論叢』第5号、2024年3月
- ・「往還と舟運による地域運営——“中道橋”保存のための覚書を兼ねて——」、熊本大学永青
文庫研究センター『永青文庫研究』第7号(2024年3月)

研究発表

- ・「熊本藩の在中瓦葺禁止令と江藤家住宅」、2024年1月13日、熊本近代史研究会、熊本市民会
館第8研修室

講演

- ・「歴史学研究の『現場』——1点の村庄屋文書から見える世界情勢——」、2023年10月23日、
長崎県立長崎北陽台高等学校

安高 啓明

各種委員会

大田区立勝海舟記念館資料調査委員会委員長、八代市立博物館未来の森ミュージアム協議会
委員、天草市立キリシタン資料館運営委員会委員長、南島原市有馬キリシタン遺産記念館資
料収集検討委員会委員、熊本市公文書館等管理委員会委員、上天草市文化財資料評価委員会
委員長

著書

- ・監修『天草の崎津集落世界文化遺産登録5周年記念 潜伏キリシタンのまなざし』(天草市・
天草市立キリシタン資料館、2023年12月)

論文・史料紹介・書評等

- ・単著「五島藩禁教政策と潜伏キリシタンの評価—熊本藩と天草の比較を通じて」(『専修大学

人文科学研究所月報』第324号、2023年7月)

- ・単著「「合足組」事件にみる庄屋側の潜伏キリシタン認識」(『天草の崎津集落世界文化遺産登録5周年記念 潜伏キリシタンのまなざし』2023年12月)
- ・単著「書評 神保文夫『近世法実務の研究』」(『法制史研究』第73号、2024年3月)
- ・単著「書評 鈴木康子『転換期の長崎と寛政改革』」(『中央史学』第47号、2024年3月)

講演・学会

- ・「天草四郎とは何者か」熊本県立上天草高校、2023年7月13日
- ・「砥岐組大庄屋藤田家文書の構造と資料価値」熊本県文化財保護協会第2回文化財研修会、上天草市松島アロマ、2023年7月20日
- ・「島原大変肥後迷惑にみる災害伝承と復興政策」里山ギャラリー歴史・文化講座 肥後の里山ギャラリー、2023年9月30日
- ・「島原大変肥後迷惑」一般社団法人大学コンソーシアム熊本 肥後の里山ギャラリー、2023年11月11日
- ・「江戸幕府の禁教政策と小倉藩の状況」全国かくれキリシタン研究会第32回小倉大会、ホテルテトラ北九州、2023年11月17日
- ・「合足組とは何か～天草崩れとその後」潜伏キリシタンのまなざし展講演会、天草ロザリオ館、2023年12月10日
- ・「天草の古文書を読もう～“類族”と“潜伏”」潜伏キリシタンのまなざし展講座、天草キリシタン館、2023年12月17日
- ・「類族と潜伏キリシタン」潜伏キリシタンのまなざし展講演会、天草キリシタン館、2024年1月21日
- ・「天草の古文書を読もう～天草崩れとその後」潜伏キリシタンのまなざし展講座、天草ロザリオ館、2024年1月28日
- ・「古文書入門」熊本市東部公民会自治会、2023年度毎月第1・第3水曜日
- ・「古文書を読む」NHKカルチャー熊本教室、2023年度毎月第1・3金曜日
- ・「古文書で読む肥後・天草キリシタン史」NHKカルチャー熊本教室、2023年度毎月第1水曜日

4. 記者発表要旨

- (1) 1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見、
初期薩摩藩政の実像が明らかに
- (2) 1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明
—芦北の地侍だった！—

令和5年5月10日

報道機関 各位

熊本大学

1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書
18カ条を発見、初期薩摩藩政の実像が明らかに

(ポイント)

- 熊本大学永青文庫研究センターによる熊本藩第一家老松井家の文書群の詳細調査で、1651年に薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条（慶安4年2月27日 村田門左衛門申上覚）の原本が発見されました。
- 当該期の鹿児島藩に関する歴史資料は大半が失われており、本史料から得られる多様な情報は、初期鹿児島藩政の研究にとって極めて重要です。
- 報告の背景には、九州が対外的な脅威にさらされる中で、琉球及び八重山諸島などを実効支配し、琉球や明との交易を展開していた薩摩の抑えが、細川家の重要な役割として浮上したという事情がありました。

(記者発表について)

本研究成果について、詳細を説明する機会を以下のとおり設けます。

参加をご希望の場合は、お手数ですが、別紙1「連絡票」により、5月15日（月）までに本学総務部総務課広報戦略室までご連絡願います。

- ・日時：令和5年5月18日（木）10:30～12:00（予定）
- ・場所：熊本大学黒髪南キャンパス 工学部1号館2階共用会議室A

(概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの後藤典子特別研究員は、1651年に熊本藩細川家から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条（慶安4年2月27日 村田門左衛門申上覚）の原本を「熊本大学所蔵松井家文書」の中から発見し、同センターの稲葉継陽教授とともに解読を進め、初期鹿児島藩政に関する多くの未知の情報が記載されていることを明らかにしました。

海外と独自の交易関係を維持し、後には明治維新の中心勢力となる鹿児島藩ですが、じつは、幕末・明治期の戦禍等によって、鹿児島にあった多くの歴史資料が失われています。今回、初期鹿児島藩政に関する未知の情報を熊本で発見することができました。

17世紀中期鹿児島藩の税制、金山開発、異国船警備、琉球支配、経済・財政状況、さらには、先ごろ御楼門・本丸のあったエリアが国史跡に追加指定されることになった鹿児島城の石垣・門の構築過程や被災の状況、また一向宗の信者を屋久島などへの流刑に処していたことを示す記述は、多くが初め

て知られるものです。

さらに、熊本藩から薩摩に密偵が派遣された事情も注目されます。17世紀中葉、大航海時代のあと、特にスペインの日本侵攻の脅威とキリシタン問題などによって、いわゆる鎖国体制へと突入しますが、崩壊に瀕した明から数十回に及ぶ日本への援助要請があるなど、その時期、特に九州は対外的な脅威にさらされていました。そうした中で、琉球及び八重山諸島などを実効支配し、琉球や明との交易を展開していた鹿児島藩に対する警戒から、「薩摩の抑え」が熊本藩細川家の重要な役割になっていました。密偵の派遣はこうした状況で行われていました。

今回の記者発表（5月18日（木））当日は、鹿児島藩研究の第一人者である原口泉氏（志學館大学教授、鹿児島大学名誉教授）からもご説明いただきますが、この発見を踏まえて、今後、熊本と鹿児島の研究者どうしの協働によって、次の点がより明確にされることが期待されます。

- (1) 初期鹿児島藩政に関する熊本側の情報集約による具体像の解明
- (2) 「鎖国」体制確立期における鹿児島藩の外交的位置に関する熊本藩及び幕府の認識の解明

（説明）

〔研究の背景〕

永青文庫研究センターでは、日本近世の社会と政治の全体像に接近するため、永青文庫細川家文書や庄屋文書とあわせて、熊本大学所蔵松井家文書36,000点の1点ごとの詳細調査に取り組んでいます。この古文書群からは、これまでも未知の史実を示す史料がいくつも発見されていますが、今回は鹿児島藩研究に資する多くの内容を含む発見であるため、原口教授との共同の記者発表に至りました。

〔本史料の歴史的背景〕

本史料は、慶安4年（1651）2月27日付けで村田門左衛門から葦北（佐敷）番代の職にあった坂崎清左衛門尉に出された18カ条の報告書の原本です。村田門左衛門は、肥後藩から薩摩藩に遣わされた「目付」（「横目」、密偵）で、葦北番代の重臣坂崎清左衛門尉を通して筆頭家老の松井興長に報告され、熊本大学所蔵松井家文書（約36,000点）の中に伝来しました。

当時は熊本藩主細川光尚（1619—1650）が慶安2年12月に急逝した直後で、わずか8歳の綱利が家督を継ぎ、小倉藩主小笠原忠真（1596—1667）が後見人となって、家老合議制のもとで治世が行われていました。鹿児島藩の当主は島津光久（1616—1695）でした。

細川光尚が1640年代に発給した複数の文書によれば、彼は薩摩との戦争さえ想定していたことが窺えます。薩摩島津家は鎖国後の海外貿易の場（口）の一つとして琉球口の管理を幕府に認められ、国家的な対外政策を担っていましたが、一方で、諸外国と結託する危険性も十分想定されました。

この頃、江戸では薩摩が大船20艘を建造して異国へ遣わしたなどという噂も飛び交っていたほどです。幕府の長崎奉行は、そのような江戸の情報を内々に肥後細川家に伝え、細川家に薩摩抑えの目付としての役目に期待していました。しかし、薩摩の琉球侵攻・支配の実態は不透明で、光尚は正保4年（1647）、

琉球へ異国船が到来して薩摩の御番衆（警備・警固にあたる者）がこれを打ち果たしたとの報を幕府にいちはやく注進し、以後も薩摩の監視を怠りませんでした。

その後、病気で自らが「薩摩の抑え」の役割が果たせないことを心配しながら、光尚は慶安2年（1649）12月に亡くなります。しかし、その遺志は家老たちに引き継がれました。

本報告書は、こうした状況のもとで作成されました。報告者の密偵・村田門左衛門は、薩摩での任務をこなせる力量をとくに認められて抜擢・派遣された人物だと推察されます。

[成果]

本報告書を解読したところ、鹿児島県の史料が戦禍等で失われたために知り得なかった多くの情報が記されていることが判明しました（別紙2「発見史料の現代語訳」のとおり。以下の番号は別紙2中の現代語訳の項目）。

②人頭税制、③金山開発の凍結、⑤薩摩沿岸の異国船警備・防衛システム、⑥琉球・八重山支配、⑦⑧経済・財政状況、⑪⑫家老衆の権力分担にまで及ぶ情報は、いずれも重要です。

わけても注目されるのが、④鹿児島城本丸の石垣及び門の構築過程や被災の状況、また⑰鹿児島藩では厳禁であった一向宗の取り締まりと遠島刑との関係を示す報告です

④では、1651年段階での鹿児島城の藩主屋敷の石垣及び門の構築状況とともに、洪水による石垣被災について報告されています。ここは昨年、国史跡へ追加指定されることになった区域にあたり、国指定史跡鹿児島城跡の今後の調査と整備活用に資する情報としても極めて重要です。

⑰では、鹿児島藩によって摘発された一向宗信者が屋久島をはじめとする離島に流罪とされていた事実が報じられています。特異な一向宗禁制を敷いていた鹿児島藩の近世初期における信者百姓の処分の具体像を示す史料の発見は初めてであり、刑政史や屋久杉切り出しの歴史にも関係する内容です。

さらに、⑤⑥など対外関係に関する報告、⑦⑧の鹿児島藩財政・経済状況や、⑪⑫の権力構造に関する情報が含まれることは、東アジアにひらかれた鹿児島藩島津家に対する細川家・幕府の警戒ぶりを物語っています。

[今後期待される展開]

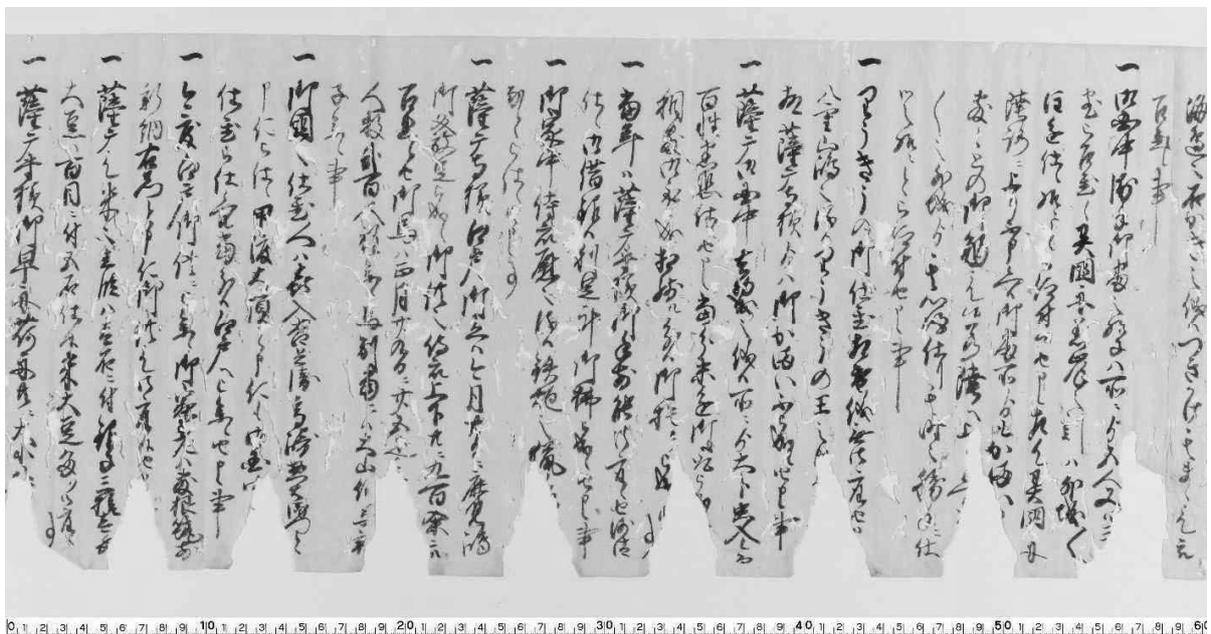
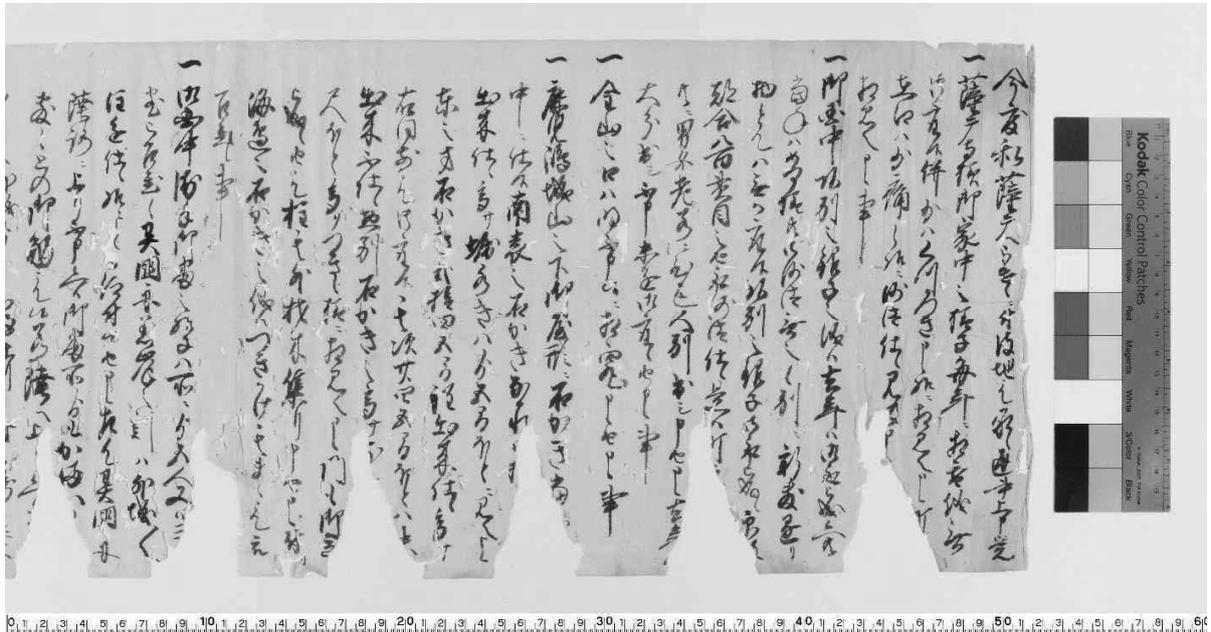
今後、熊本と鹿児島との共同研究によって、次の点がより明確にされることが期待されます。

(1) 初期鹿児島藩政に関する熊本側の情報集約による具体像の解明

「熊本大学所蔵松井家文書」の中には、鹿児島藩島津家の政治・統治に関する古文書がまだまだ多く含まれていると考えられます。熊本大学における基礎調査によって得られた知見を鹿児島の研究者と共有しつつ検討することで、不明な点も少なくない鹿児島藩政のあり方を解明し、後に明治維新の主体となる同藩の政治的基盤をより深く理解できるようになるはず

(2) 「鎖国」体制確立期における鹿児島藩の外交的位置に関する熊本藩及び幕府の認識の解明

上記と同様に、当該期の鹿児島藩の対外関係に関する情報を記した更なる史料の発見が期待されます。それらから得られる情報を総合し、当該期の鹿児島藩の外交的位置に迫ることは、「鎖国」体制確立期の東アジア情勢のより具体的な理解につながります。



【別紙】 発見史料の現代語訳

今度私は薩摩へ遣わされ、彼の地で聞き及んだ通り書き上げ申し上げます。

① 島津家と領内の一般状況

一、薩摩守様御家中の様子は、いつもの年と変わることはありません。しかしながら、少しは余裕があるように拝見します。町・在郷は、災害により少し被害があるように言われています。見及ぶ限り「 」拝見します。

② 鹿児島藩の税制

一、薩摩国中、頭別の銀子の件は、去年は徴収されたけれども、当年はどのようになさるかも情報はありません。別に新しい懸り物（租税）というものはありません。頭別の銀子をお取りになる員数は都合八百貫目だと言われています。これは、町・在郷ともに男女老若に至るまで人別銀を出していると聞いています。去年はかなり出しておらず、未納があるように言われています。

③ 金山開発の停止

一、金山の口は、開けないと決まったと聞いています。

④ 鹿児島城普請工事の状況

一、鹿児島城山の下の御屋形に石垣を当年中に築くことになっています。南表の石垣が洪水で流れ「 」できました。高さは堀水際より五間ほどに見えます。東の方の石垣は二十四、五間ほど出来ています。高さは右と同じで堀水際より五間ほどです。その続き二十四、五間ほどはまだ出来ていません。全体の石垣の高さは「 」尺ほど高く築いているように見えます。門も御立てになるとのことで、柱、その他の材木を集めていると聞いています。それにつき、海辺の石垣の方は築きかけたまま、そのままに置いてあります。

⑤ 島津領沿岸の異国船警備の状況

一、薩摩国中の浦手御番の様子は、所により五人、または三人ずつ番人が置かれています。異国船が着岸した時は、外城から外城へと注進するようにと命じられていると聞いています。そうして、異国船の乗組員が上陸しなければ、御番所からは決して手を出してはいけないとの御触れです。もし、陸に上がれば、「 」の外城より、状況により判断して対処してよいとの由、承っています。

⑥ 島津家の琉球・八重山支配

一、琉球の御仕置については変わることはないとのこと。八重山島のごとは、琉球の

王府の管轄なので、薩摩守様よりは手出し（関与）なされないとのこと。

⑦年貢徴収の状況

一、鹿児島藩領内では、去年の年貢は所により大規模な虫害で、百姓たちは困っていると聞いています。まずは未進分を厳しくお取りになり、取り切れなかった分は、ご容赦なさるとのことです。

⑧島津家の財政状況

一、当年は薩摩守様の勝手向きはよいと世間では噂しています。御借銀は利息だけをお払いになっていると聞いています。

⑨島津家中の娯楽

一、御家中侍衆の娯楽は、鉄炮の猟〔 〕などしていると聞いています。

⑩島津光久参勤出立の様子

一、薩摩守様、参勤で御国元を出発する予定は、今月二十日に鹿児島を御発足になります。御供の侍衆は上下ともに九百人余の衆を召し連れられるとのこと、御馬は正月二十九日に二十五疋〔 〕人数二百人ほどで参りました。馬別当は大山口親子が参りました。

⑪⑫島津家老衆の役割分担

一、御国を統治する家老は、喜入吉兵衛、高崎惣右衛門という人です。甲渡大頂という人も御国中〔 〕仕置をされますが、まずは江戸へ参られると聞いています。

一、今度江戸御供に参られる御家老は、敷根筑前、新納右衛門と申す人が御供だと聞いています。

⑬薩摩の穀物相場

一、薩摩での米の値段は、一石につき銀子三十一匁、大豆は百目につき五石です。米、大豆は在庫が多くあります。

⑭島津家所有の船舶

一、薩摩守様所用の御早船・荷船ともに大小八〔 〕あるとのこと。

⑮島津光久の娯楽

一、薩摩守様の御楽しみは、猪狩りばかりなさっていると聞いています。

⑯島津家中の軍備

一、薩摩守様の御武道具、何も〔 〕御沙汰はありません。御家中・御侍衆も同じです。

⑰島津領での一向宗（浄土真宗）取り締まりの実態

一、薩摩御国中、今はいよいよ一向宗の取り締まりが厳しくなっています。改宗していても心のうちで一向宗を信仰している者を摘発なされたら、まず私財・土地の没収を命じ

られ、それが給人知(家臣の領地)にいる百姓であれば、その給人(家臣)「 」をお売りになり、給人から藩が代銀をお取りになります。そして、門(かど)の百姓の本家の主だけを夫婦ともに引き離して、屋久島をはじめ方々の島へ流されます。もし、蔵納(島津家直轄領)の百姓であれば、親族は当面は命を助けおいて、その身代銀をお取になり、これも家主夫婦は同様にお引き離しになって島流しにされているとのこと。このような御工夫で、没収した百姓の物をお売りになって、その代銀・身代銀ともに、もはや百貫目ほども集めていると聞いています。

⑩細川家の財政状況の薩摩での評判

一、薩摩での細川家中の様子の評判は、熊本御侍衆のことは言うまでもなく、町・在々ともに事のほか逼迫しているわけではないと噂していると聞いています。また、肥後守様は御借銀は決してないだろうと申す者もいます。また、幕府の御上使・御目付衆が「 」お代わりになるので、大変な物入りで、すべてが御国の痛みになるので、御借銀もできるだろうと申す者もいると聞いています。

右は、今度薩摩へ派遣されたのにつき、正月十七日より二月二十五日までの間、鹿児島、その他の在々にて情報を収集し、罷り帰つてすぐ、報告書を提出します。以上。

慶安四年二月廿七日

村田門左衛門(花押)

坂崎清左衛門尉殿

【解禁日時】

令和5年10月27日(金) 12時



令和5年10月18日

報道機関 各位

熊本大学

1651年に熊本藩から薩摩に派遣された 密偵の正体が判明—芦北の地侍だった！—

(ポイント)

- 慶安4年(1651)2月に熊本藩細川家から鹿児島藩領薩摩に派遣された密偵の報告書が熊本大学所蔵松井家文書から発見されたことに伴い、本年5月18日(木)に記者発表を行いました。その時点では密偵の正体は不明でした。今回、この密偵「村田門左衛門」の正体がついに明らかになりました。
- 村田家は細川家中の侍ではなく、戦国時代から芦北郡内に住み、加藤清正にも仕えた「地侍」*1でした。
- 細川家は、鹿児島藩の動向の把握という重要な役割を、薩摩との深いつながりを維持していた芦北郡の有力住民(地侍ら)に依存してこそ果たし得たものと考えられます。

(記者発表について)

本研究成果について、詳細を説明する機会を以下のとおり設けます。参加をご希望の場合は、お手数ですが、別紙1「連絡票」により、10月23日(月)までに、本学総務部総務課広報戦略室まで、メール(sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp)にてご所属及びご氏名をご連絡願います。

- ・日時：令和5年10月27日(金) 10:30~12:00(予定)
- ・場所：熊本大学 本部棟1階 大会議室(熊本市中央区黒髪2-39-1)

(概要説明)

1. 本年5月18日(木)、熊本大学永青文庫研究センターの稲葉継陽センター長・教授、後藤典子特別研究員らの研究グループは、1651年に熊本藩細川家から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条(慶安4年2月27日村田門左衛門申上覚)の原本を「熊本大学所蔵松井家文書」の中から発見、解読をすすめ、初期鹿児島藩政に関する多くの未知の情報が記載されていることが明らかになったことについて、記者発表を行いました。

密偵派遣の背景には、九州が対外的な脅威にさらされる中で、琉球及び八重山諸島などを実効支配し、琉球や明との交易を展開していた島津

家の抑えが、細川家の重要な役割であったという事情がありました。ところが、こうした重大な任務を見事にこなした村田門左衛門の名は、当時の細川家臣団の名簿にも記載されておらず、正体の解明が課題となっていました。

2. 本年6月初め、稲葉教授のもとに梅下俊克氏（水俣市在住）から自分の先祖が代々村田門左衛門を称していたと聞いていると連絡がありました。梅下氏と稲葉教授、後藤研究員らがそれらの情報を基に、共同で関連史料を精査したところ、以下の事実が判明しました。

- ・村田門左衛門家は細川家中の侍ではなく、芦北郡内に住みながら加藤清正にも仕えた、由緒ある「地侍」であったこと。
- ・1651年、村田門左衛門は他の地侍3人とともに薩摩に情報収集のために派遣され、職務を遂行し、その褒美として細川家から知行5石を拝領し、10石取りとなったこと。
- ・「永青文庫細川家文書」からは、1640年代から50年代にかけて、芦北郡の地侍らが薩摩国に継続して派遣されていたことがわかる。17世紀半ば、熊本藩細川家は芦北地侍衆に依存することで、鹿児島藩の情報を継続的に収集していたこと。

（説明）

〔背景〕

1651年の村田門左衛門の報告書には、鹿児島城の被災と石垣構築の状況、鹿児島藩の税制、対外政策、経済状況、さらには宗教政策にまで言及する貴重な内容をはじめ、島津家中の相当の高官からではないと入手できない情報ばかりが記載されていました。しかし、5月18日（木）の記者発表を伝えた「朝日新聞」（同年7月3日付け文化面）に、「この村田門左衛門という人物、報告の書きぶりを見る限り密偵に抜擢されるだけの力量と素養を身につけた人物のようだが、家臣団の名簿に見えない。はたしてその特殊な役割と関係するのかどうか、歴史の闇はますます深い」と掲載されているとおり、熊本藩の薩摩からの情報収集という大役をつとめあげた密偵村田の正体の究明が、大きな課題となっていました。

〔研究の内容〕

本年6月における梅下俊克氏からの情報の提供を契機に、下記の文献史料を解読・検討しました。

(1) 「村田武平太先祖付」

村田門左衛門の子孫で芦北郡地侍の村田武平太が、安永9年（1780）4月に先祖の事績を書き上げて熊本の芦北郡代に提出した文書の控え。

(2) 慶安3年（1650）5月7日 佐敷番代坂崎清左衛門伺書 家老中裁可「永青文庫細川家文書」

芦北郡の境目防衛等を担当する佐敷番代の細川家重臣坂崎清左衛門が、細川家老中に決裁を求めた19ヵ条の上申文書。家老衆の決裁文言が書き込まれている。

(3) 芦北郡津奈木手永惣庄屋「徳富家文書」

芦北郡津奈木手永の惣庄屋をつとめた徳富家に伝来した記録。芦北郡の

地侍に関する多くの情報を含む。

[成果]

上記史料からは次のことを読み取ることができました。

(1) 「村田家先祖付」

密偵となった村田門左衛門の父親・与兵衛は加藤清正に仕え、知行100石を拝領して佐敷城代加藤大和殿に「与力」として配属され、芦北郡内に居住しつつも加藤大和守から信頼される存在であった。しかし1632年に加藤家が改易となると牢人（浪人）し、引き続き芦北郡内に居住した。そこに熊本藩主として入国してきた細川家から、「地侍」として在村のまま高5石を拝領して召出された与兵衛は、村田門左衛門と改名した。その子の門左衛門は、「薩摩へ御聞繕の御横目」＝密偵として派遣された地侍4人のうちの一人で、任務をつとめた「御褒美」に高5石を加増され、その後も10石取りの「地侍」として奉公した。村田家は地侍の家として続いていった。

(2) 「永青文庫細川家文書」

細川光尚が当主だった期間（1641～1649）には、1年に6度ずつ「隣国」（薩摩・日向）に芦北郡の「地侍」を派遣していた。前年末における光尚の死去をうけて慶安3年（1650）から始まった家老合議制のもとでも派遣を続けるかどうか、佐敷番代坂崎は家老中に確認を求めた。これに対して家老中は、前年までの仕法どおりに派遣を継続する旨、確認していた。また、正保3年（1646）の細川光尚の決裁文書によると、芦北の地侍は一度に4人ずつ派遣され、褒美として知行高5石が与えられた先例がすでにみられる。こうしたことから、細川光尚死去直後の慶安3年5月に、芦北郡地侍衆の派遣を従来どおり継続することが確認され、そのもとで翌年薩摩に派遣された地侍の一人が村田門左衛門であったことが判明した。

(3) 芦北郡津奈木手永惣庄屋「徳富家文書」

加藤家改易後に小倉から熊本に入った細川忠利は、領内諸地域にいた加藤家旧臣等を「地侍」として積極的に召抱えた。島津領薩摩国との境目にあたる芦北郡では、入国早々に200人以上の地侍を登用したが、村田門左衛門（密偵の父）は、寛永12年（1635）正月に芦北地侍衆を代表して忠利にお目見えした30人のうちの一人に指名された、地侍の代表格であった。

いわゆる鎖国体制が確立された直後の1640～50年代の細川家は、琉球との交易を幕府から委任された鹿児島藩の動向の把握を、幕藩体制の安定に資する固有の役割だと自覚していた。しかしその役割は、戦国以来、薩摩との深いつながりを維持していた芦北郡の有力住民（地侍）に依存してこそ果たすことができたという事情が、以上の検討から分かってきた。

九州の秩序、ひいては幕藩制国家の安定には、境目地域の地域住民が大名領を越えて維持してきた地域間ネットワークによって支えられていた面があると考えられる。

[展開]

これまで、芦北郡の地侍が百姓鉄炮衆とともに番所の警固、天草一揆時の沿岸警固、原城攻めへの出陣など、軍事面で大きな役割を果たしたことは

知られていました。しかし、彼らが鹿児島領へ「横目」＝密偵として入り込んで情報収集していたことは、ほとんど知られておらず、収集していた情報の具体的内容は、村田門左衛門の報告書によって、初めて明らかになったのです。

芦北郡は薩摩街道（現国道3号線）が縦断し、芦北の有力住民らは、中世以来、薩摩との交易・交通に深く関与していました。そればかりか、戦国時代には島津家の直接支配をうけた時期もありました。江戸時代、村田家も含む芦北の地侍たちは、島津家の参勤行列が郡内を通行するに際して、出迎え、休憩、宿泊などに奉仕しました。そこでも交流と情報交換がなされ、密偵としての活動に役立てられたものと推察されます。

今回の発見が、連邦制的な日本の近世国家の統合を維持するうえで境目の地域住民らが果たした役割を追究する契機となることが期待されます。

[用語解説]

※1 熊本藩における「地侍」

領国内の各地に存在した在村の侍。細川家中の侍とは異なり、多くが相良氏や阿蘇氏、大友氏など九州の戦国大名の家臣であった由緒をもつ中世以来の地域住民で、元来の居住村で知行を与えられ、農業等の経営に携わるとともに、武士身分として番所警固をはじめとする御用をつとめた。その人数は、1641年の時点で領国内各地の番所に配備されていたのが696名、うち芦北郡のそれは460名にのぼった。

(参考)

- ・1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18カ条を発見、初期薩摩藩政の実像が明らかに（令和5年5月10日プレスリリース、5月18日記者発表）

<https://www.kumamoto-u.ac.jp/whatsnew/zinbun/20230518>

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター
担当：（センター長・教授）稲葉 継陽
電話：096-342-2304
e-mail：inaba@kumamoto-u.ac.jp



地図データ ©2023 TMap Mobility、Google 50 km 

5. 講演要旨

- (1) 稲葉継陽 「「天下泰平」と百姓鉄炮—葦北御郡筒と地侍—」
- (2) 今村直樹 「通潤橋の建設過程と領国地域社会—熊本藩政の特質—」

「天下泰平」と百姓鉄炮—葦北御郡筒と地侍—

熊本県文化財保護協会 第9回文化財研修会

2024年2月14日 稲葉 継陽

はじめに

- (1) 世界史的にも稀有な江戸時代の200年以上の長期平和（内戦と対外戦争の凍結）
→「天下泰平」を支えた真の力はなにか
- (2) 「江戸時代の戦争と平和」という観点←軍隊を維持する270藩の分立、60,000もの武装した村
- (3) 「私たちの歴史」としての「戦争と平和」
「江戸時代の戦争と平和」とは、武器を保持する地域住民すなわち私たちの先祖にあたる一般百姓の問題
→戦国の土一揆=動乱にかえるな、という社会的コンセンサスが、もう一つの柱になって武器行使を長期凍結

I 国境の城

1. 慶長5年（1600、関ヶ原直後）～慶長20年（1615、いわゆる一国一城令）の本城と支城

(1) 加藤領の本城と支城

他国とつながる街道沿いの境目、海の国境に配置、多くが戦国期の拠点城郭に隣接して新たに普請した近世城

(2) 細川領・黒田領の本城と支城

領国境目を挟んで睨み合うように支城を配置、両家の緊張時には細川忠興が実際の軍事活用を示唆

2. 加藤領における慶長17年（1612）の水俣・宇土・矢部城破却の事情

【幕府の指示】

- ①「肥後国百姓」の「困窮」は将軍も承知しているので、累積した未納年貢を破棄して徳政を加えよ
- ②「家中諸侍」の国許における役儀は清正の時の半分にせよ
→百姓と下々の家臣までもを含む「諸侍」にとって、支城の破却は未納年貢の破棄や役儀半減とならんで求められた徳政。大名家の領国支配をめぐる構造的矛盾（百姓経営の保全⇔支城群の維持動員）に起因する御国・家中統治の不全にこそ、公儀権力の支城破却徳政を呼び込む政治的な磁力が生じた

3. 「徳川の平和」の内実

寛永20年（1643）の細川光尚覚条々……島津氏の九州北部侵攻の可能性

一連の備えは細川・島津両家の関係が良好なら九州の平和が維持されるという光尚の認識に基づく、いわば専守防衛策→「隣国のおさえ」としての役割を果たすべきだという細川家の自己認識

→拡張主義的な武力行使を抑止する大名の思想が不戦の柱の一つ。しかし、城なき境目の防備は誰が担うのか？

II 国境の庄屋と村の武力

1. 境目の庄屋たち

寛永10年4月、沢村大学父子による葦北郡の9人の庄屋に関する報告書

①16世紀末（親の代）からの度重なる戦乱における政治的態度の一貫性と居住村の地政学的重要度、②武功の如何、を調査…慶長5年の内戦において湯浦や田浦の庄屋は佐敷城に籠城

2. 庄屋と村の武力

天正20年（1592）、田浦村の庄屋助兵衛や近右衛門は「所の者」を糾合・統率して、島津家臣の一揆を撃退

→情報収集や秘密の工作といった特殊任務の遂行、「他国」へ立ち退いた場合の秘密の保持を誓う起請文を提出

3. 村の武力の実体とルーツ

(1) 永禄期（戦国盛期、1560年代）

葦北郡の「地下衆」における鉄炮所持の初見は永禄期（『相良家文書』650、651号）

(2) 秀吉の九州出兵

百姓の武器の没収は占領態勢のような特殊状況での一時的措置で、占領解除に際しては戦国期以来の百姓の武

器保有の事実と権利をむしろ保障するのが、九州国分の強制執行に際しての秀吉の基本政策

(3) 寛永10年(1633) 水俣・津奈木・久木野からの百姓鉄炮指出

葦北郡庄屋衆の由緒調査とともに、細川家は3手永から百姓の保持する鉄炮数・所持者・口径を書上げさせる
1村あたりの鉄炮数…水俣手永16.3挺/津奈木手永5.5挺/久木野手永17.0挺

→薩摩との国境に接している水俣・久木野両手永における百姓所持鉄炮数は際立って多い

→境目の村々には武器としての鉄炮を所持する百姓を中核とした村の武力が存在し、16世紀末の内戦では庄屋衆がそれらを統括して境目の城に籠城し、地域を防衛した実績があった。戦国期から近世前期を一貫する百姓の武装と武力の存在を踏まえて、「江戸時代の戦争と平和」を考える必要がある。

III 村の鉄炮への依存—境目の平和の実像—

1. 寛永11・12年の葦北郡筒・地侍の取立て

(1) 郡筒の取立て

肥後入国直後の寛永10年(1633)に葦北郡内の百姓鉄炮数指出を手永切で徴収した細川家の目的は、百姓の武装解除などではなかった。逆にこの大名家は、

①同郡の鉄炮所持百姓390名に5石ずつの給分を遣わして在村鉄炮衆＝「郡筒」と位置づけ

②寛永11年には、村々と惣庄屋に依存して人選実務を丸投げし、さらに300名の登用を企図

→境目百姓の武力に領国支配体制下での公式な位置を付与

(2) 地侍の取立て

地侍…領国内の各地に存在した在村の侍。細川家中の侍とは異なり、多くが戦国大名や加藤家の家臣であった由緒をもつ中世以来の地域住民(牢人衆)。元来の居住村で知行を与えられ、農業等の経営に携わるとともに、番所警固をはじめとする御用をつとめた

①寛永12年(1635)正月に葦北地侍衆を代表して30人がお見え

②地侍の取立て方式…「牢人衆」や無高百姓のうちから惣庄屋らが選抜し郡奉行に上申

2. 島原・天草一揆(寛永14～15年)における百姓鉄炮

(1) 一揆勃発時の沿岸防備体制と百姓鉄炮

細川家が入国いらい百姓鉄炮衆登用政策を進めてきた理由

→長大な海岸線と陸上山中の国境をかかえる熊本領では、境目要所の防衛を通常軍団のみで実現することは不可能であり、多数の百姓鉄炮に頼らなければならなかったため

(2) 寛永18年(1641)、熊本藩郡方奉行が把握する百姓・地侍等の鉄炮数(熊本大学日本史学研究室蔵「御郡筒之御帳」)

葦北郡 562挺 八代郡 108挺 宇土郡 38挺 益城郡 144挺 飽田郡 46挺 山本郡 189挺

玉名郡 172挺 山鹿郡 132挺 菊池郡 151挺 合志郡 30挺 阿蘇郡 601挺 久住 129挺 鶴崎 115挺

合計 2,417挺

→領国内の主要街道上の要所に番所詰めの御郡筒を配備、ちなみに細川家54万石の軍役鉄炮は1,700～1,800挺

(3) 百姓鉄炮の原城攻めへの動員とその限界

寛永14年末、細川忠利は多くの葦北百姓鉄炮(「御郡鉄炮衆」と地侍を原城攻めに動員

→年が明けて春の勸農の時節になると、葦北郡の村々と惣庄屋衆は「御郡筒衆百人」を国に返すよう、財政担当奉行を通じて家老衆に要求。原城は2月末に落ちたが、もしもさらに長引いていたらどうなったか?

→百姓を外に動員することの限界と困難さ、大名権力は動員(軍事)と勸農(徳政)との矛盾に満ちた統一体

IV 天下泰平を支えた力

1. 元和元年(1615)のいわゆる一国一城令(諸国城制)の政策意図と効果

通説…支城破却の強行が幕府の軍事権限を拡大して諸大名の軍事力を削減、同時に大名家内部における当主(居城主)の軍事・政治権限を拡大して一門・家老衆(支城主)の軍事・政治権限を削減したものと評価。こうして將軍を頂点とした主従制度上の上位者が軍事力を独占し、その「武威」による「天下泰平」を確立した。

■百姓の観点から私見

- ①堀・石垣と多くの櫓をもつ城郭の普請労働（内牧城や杵築城の事例）からの解放＝徳政
- ②城なきあとの境目をまもるのは村の武力、幕藩権力は軍事の実力までも百姓・地侍らに依存

2. 天下泰平を支えた力

葦北の百姓鉄炮の選抜は藩（家老・惣奉行・郡奉行）から村々に丸投げ

- 鉄炮を所持する百姓を管理し、武器としての鉄炮の使用を厳しく規制し続けたつよい力は、村々の自治の現場にこそ存在したのではないか？

3. 葦北郡地侍衆の島津領内（「鹿児島其外在々」）での情報収集

(1) 「慶安4年（1651）2月 村田左衛門申上覚（佐敷番代宛、筆頭家老松井興長に転送）」の発見

- ①人頭税制、②金山開発の凍結、③鹿児島城本丸の石垣及び門の構築過程・被災状況、④薩摩沿岸の異国船警備・防衛システム、⑤琉球・八重山支配、経済・財政状況、⑤家老衆の権力分担、⑥一向宗の取り締まりと遠島刑との関係 などの情報を報告

→細川家は鹿児島藩の内政・経済・外交に関するリアルタイムの情報を獲得、幕府（長崎奉行）と共有か

(2) 村田門左衛門は葦北郡湯浦の地侍

- ①村田門左衛門家は細川家中の侍ではなく、葦北郡内に住みながら加藤清正にも仕えた由緒ある「地侍」（村田武平太先祖附）

- ②1651年、村田門左衛門は他の地侍3人とともに薩摩に情報収集のために派遣され、職務を遂行し、その褒美として細川家から知行5石を拝領し、10石取りとなった（同上）

- ③細川光尚が当主だった期間（1641～1650）には、1年に6度ずつ「隣国」（薩摩・日向）に葦北郡の「地侍」を派遣、次いで光尚急死後の家老合議制期にも村田らの派遣を継続

→いわゆる鎖国体制確立期にあたる1640年代から50年代にかけて、葦北地侍らが薩摩国に継続して派遣

- 17世紀半ば、熊本藩細川家は、薩摩との日常交流の主体である葦北地侍衆に依存することで、鹿児島藩の情報を継続的に収集し、島津家の対外関係と軍事・内政の動向に即応可能な態勢をとることができた

すなわち、九州の秩序、ひいては幕藩制国家の安定は、境目地域の住民が大名領を越えて維持してきた地域間ネットワークによって支えられていた面がある

- 連邦制的な日本の近世国家の統合を維持するうえで境目（葦北郡）の住民らが果たした役割を追究する必要性

おわりに

- (1) 「天下泰平」が長期にわたって維持された事実の真の意味は、私たちの先祖にあたる地域住民の非戦の実績と、境目地域の住民の紛争回避のための継続的活動抜きには理解できない

→藩ひいては幕府は境目の地域住民に依存

- (2) そのレガシーと、1945年を境とした平和の歴史とを、何らかの方法によって地続きのものと捉える歴史認識が、平和主義の未来に向けての発展にとって不可欠

【参考文献】

稲葉継陽『近世領国社会形成史論』（吉川弘文館、2024年）第I部第4章（諸国城割）、第II部第1章（葦北郡百姓鉄炮）

稲葉継陽「天下泰平」と百姓鉄炮—八代・葦北郡をめぐる—（八代市立博物館図録『町人と百姓の江戸時代』2022年）

稲葉継陽・清水克行編『村と民衆の戦国時代史 藤木久志の歴史学』（勉誠出版、2022年）

上高原聡「加藤領肥後一國統治期の支城体制について」（山田貴司編『シリーズ・織豊大名の研究2 加藤清正』戎光祥出版、2014年）

藤木久志『刀狩り 武器を封印した民衆』（岩波新書、2005年）

記者発表「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の報告書18ヵ条を発見、初期薩摩藩政の実像が明らかに」（2023年5月）

<https://www.kumamoto-u.ac.jp/whatsnew/zinbun/20230518>

記者発表「1651年に熊本藩から薩摩に派遣された密偵の正体が判明—葦北の地侍だった！—」（2023年10月）

<https://www.kumamoto-u.ac.jp/whatsnew/zinbun/20231018-1>

通潤橋の建設過程と領国地域社会——熊本藩政の特質——

2024/02/12 於 KKR ホテル熊本
熊本大学永青文庫研究センター 今村 直樹

はじめに

概要 土木構造物として初の国宝となった通潤橋。どのような文化財的な価値や日本史上の意義を有しているのか？江戸時代の社会的背景および熊本藩細川家の統治システムの特質に注目しながら検討

◇ 通潤橋とはなにか

- ・ 嘉永7年(1854)8月完成の石橋。阿蘇山麓の白糸台地に通水するための用水路(通潤用水)の一部
- ・ 多くの肥後石工が建設に参加。熊本藩の直営ではなく、地域行政機構である上益城郡矢部手永の事業
- ・ 橋長約78.0m、幅6.6m、橋高約21.3m、アーチ径約28.1m→霊台橋に匹敵する江戸時代最大級の規模
- ・ 昭和35年(1960)2月に重要文化財指定、令和5年(2023)9月25日に国宝指定→土木構造物の第1号
←これまでの国宝(建造物)の大半は、江戸時代以前の神社・寺院・城郭・住宅などの建築物

◇ 通潤橋をめぐる評価の推移

- ・ 通潤橋の建設を可能にした要因は何か。戦前から現代まで、時代とともに評価の力点は緩やかに変化
①布田保之助(矢部手永惣庄屋)個人の功績【図1】、②肥後石工の高度な技術力、③熊本藩手永制の役割
- ・ その価値を包括的に捉えた『重要文化財 通潤橋総合調査報告書』(山都町教育委員会、2023年)の画期性
→本講演は、国宝指定の重要な一歩となった上記報告書の成果に依拠するもの

◇ 本講演のねらい

- ・ なぜ、通潤橋は土木構造物第1号の国宝となったか？その価値の高さや日本史上における意義深さとは？
- ・ 通潤橋は、幕末期の地域社会(手永)によって建設。なぜ、幕末期の建設なのか？なぜ、地域社会の力で造ることができたのか？なぜ、熊本藩領でそれが可能になったのか？以上の論点について検討

1. 「国宝」通潤橋の価値

(1) 国宝(建造物)の指定基準

- ・ 国の重要文化財の指定基準…「各時代又は類型の典型」であるとともに、意匠、技術、歴史、学術、流派的・地方的特色の5つの基準のうち1つ以上に合致する必要性
- ・ 国宝の指定基準…「(a)重要文化財のうち極めて優秀で、かつ、(b)文化史的意義の特に深いもの」
→通潤橋が国宝になったのは、重文指定の石橋における優秀さ(技術的価値の高さ。傍線部(a))に加え、江戸時代のインフラ(社会資本)整備事業の歴史的意義とそこでの特質(傍線部(b))が証明されたため
→文化審議会答申：「近世水利土木施設の到達点を示す近世石橋の傑作」としての通潤橋

(2) 通潤橋の技術史的価値

- ・ 江戸時代における他の石橋や水路と比べて、通潤橋が技術的に優れているのはなにか？
①江戸時代最大級のアーチ径と壁石の高さ
白糸台地の受益地拡大のため用水の水位を高く保つ必要から。ゆえに開水路ではなくサイホン式を採用
②サイホンと水管橋を一体化させた独創的な形式(江戸時代には類例無し)
密閉した管形式の水路橋=水管橋。かつサイホンの高水圧に耐えるため、木樋ではなく石造水管を採用
③重い石管を支えるため、アーチの脚部に鞆石垣を覆い被せ、内部には裏築を使用
下部は緩やかで、上部にいくほど急直な勾配に変化する石垣=鞆石垣。熊本城の石垣と類似
④定期的な維持管理を考慮した構造

将来的な詰替を考慮し、石管接合に漆喰を使用。補修時に水路が完全停止しないよう通水管を三列設置

◇ 小括

- ・ 重文指定の石橋の中でも際立った価値を有する通潤橋。それでは、通潤橋の「文化史的意義」とはなにか？

2. 通潤橋建設の歴史的背景——江戸時代の社会と熊本藩政の変容——

(1) 江戸時代の大規模インフラ事業

- ・ 通潤橋の「文化史的意義」を探るには、江戸時代のインフラ事業の展開および熊本藩政の特質把握が必要
- ・ 江戸時代における米生産・稲作面積・人口の推移【表1】
- ・ 17世紀：米生産は約1.6倍、稲作面積は約1.4倍、人口は約1.6倍に急増。なぜ、経済成長は生じたのか？
→江戸幕府や藩は、領内の経済力強化のため、城下町建設・河川治水工事・新田開発などのインフラ事業を積極的に推進。当時は、幕府や藩が事業費を負担する「御普請」が主流
→but インフラ急増で維持管理費が大きな財政負担に。18世紀以降は、幕府や藩の年貢収入も頭打ちに
- ・ 18世紀以降、インフラの維持管理や新たな整備の主体は、幕府や藩から百姓層が運営する地域社会に移行
→藩の「御普請」から地域による「自普請」へ、その変化を象徴するのが熊本藩細川家の事例

(2) 熊本藩政と手永制

- ・ 戦国時代、町場を核とし、周辺村落から構成される社会的分業の単位としての地域社会が形成
- ・ 寛永9年(1632)、細川忠利の肥後入国後、行政単位として上記の地域社会が再編されたものが手永
→19世紀初めの熊本藩領は、15郡51手永1,597村で構成。1手永あたり平均村数は約31、平均石高は約1万5,000石
→手永の責任者には、百姓出身の惣庄屋が任命。手永の経済的中心地には、役所たる手永会所が設置
- ・ 18世紀後半の藩政改革以降、熊本藩では水利土木や山林管理などの事業主体が、藩庁から手永へと移行
→例えば、18世紀前半まで水利土木事業を担った藩庁塘方などの役人数は、天保6年(1835)は僅か6名
- ・ 享和3年(1803)、藩は検見制から定免制へと徴税法を改革。定額年貢を請け負う単位を手永に設定
→毎年の定額年貢確保のため、手永には自主財源や備米の新設、役人増員が認められる＝行財政機能強化
→定額年貢制のもと、自助努力分による増分が収入源となることで、手永の自主財源は充実へ

(3) 19世紀の手永制自治の発展

- ・ 定免制移行後、手永役人数は増加。安政4年(1857)の矢部手永の会所役人(小頭まで)は33名【表2】
→彼らは年間250日以上出勤する行政吏。土地管理・徴税・紛争解決・防災・教育など多くの業務を担当
→手永役人を志望する子弟は、会所見習として10代前半から出仕。能力が認められれば本採用に
- ・ 手永は、村々の要望を汲み取り、農業用水路や溜池の築造、道路整備、新田開発などインフラ事業を推進
→事業の元手となったのは、藩庁から借用する公的資金とともに手永の自主財源たる会所官銭＝「自普請」
- ・ 明治29年(1896)、熊本県知事松平正直は、地方制度(郡制)への反対意見を明治政府に提出【史料1】
→江戸時代、熊本藩政は最も優れたものとされたが、その「自治的事業」は「郷」(手永)にあり！
→「郷」に惣庄屋が置かれ、水利・開墾・貯蓄等の「自治事業」を実施。19世紀の手永制は全国から注目

◇ 小括

- ・ 18世紀以降、インフラ事業は「御普請」から「自普請」に移行。熊本藩の場合、事業主体が藩庁から手永に移行し、それに伴い19世紀には手永の行財政・自治機能が充実。手永制自治の発展は熊本藩政の特質

3. 通潤橋の建設と領国地域社会

(1) 通潤橋の建設過程

- ・ 手永制が熟爛した幕末期(19世紀後半)、通潤橋建設はどのように進められたのか？
- ・ 通潤用水の受益村落である白糸台地7か村：畑勝ちの荒廃農村(零落所)、それまで開発の手が届かず

- ・ 嘉永4年(1851)から事業開始。橋に載せるサイホンの通水管(吹上樋)の技術が問題に。矢部手永による数度の実験
- ・ 通水管に見通しがたった嘉永5年閏2月、惣庄屋布田保之助らは郡代への事業計画書を提出
→約30.5kmの用水路を造り、約42町の開田を計画。必要な事業費として銭327貫732匁余の借用を願う
- ・ 事業計画書に対して藩庁側は、技術的な問題、事業の運営、村落間の調整、完成後の管理費用などを諮問
→これを受けて布田らは回答書を提出。橋部分に関しては、鞆石垣、地震復旧に備えた漆喰の使用を説明
- ・ 藩庁の許可を経た嘉永5年12月、矢部手永は現地工事に着手。同7年8月に通潤橋が、安政2年(1855)には通潤用水の水路網がほぼ完成

(2) 手永の技術力

- ・ 極めて高度な技術を必要とした通潤橋建設：その技術力を支えたのはなにか？
- ・ 設計施工記録「通潤橋仕法書」【史料2】：会所役人の佐野市郎右衛門と石原平次郎が鞆石垣の勾配を計算
- ・ 布田保之助と同時代の惣庄屋古閑才蔵こがさいざうの関係史料「古閑家文書」からは、手永役人の技術習得が明らかに！
①藩の算術師範による手永役人の教育
手永会所を定期訪問する算術師範への入門を、若手の会所役人に義務付け(嘉永7年)【史料3】
②熊本城石垣の「矩返し勾配」技術を説いた「石垣秘伝之書」の新たな写本の発見
18世紀以降、インフラ事業の担い手が変化するなか、近世城郭の石垣技術までも地域社会のものに
- ・ 布田たちは石橋の設計や石垣の勾配に関する多くの事例を調査。石工にも熊本城の石垣技術を習得させる
→矢部手永でも「石垣秘伝之書」を入手し、それを参考に鞆石垣の勾配が算出された可能性あり

(3) 領国地域社会の協力

- ・ 通潤橋の建設に不可欠だったのが、熊本藩領全体(=領国地域社会)からの協力
- ・ 最終的な事業経費総額は銭727貫906匁余¹。藩庁からの借用銭では足りず、手永内外から資金を調達
→矢部手永の富裕層の献金のほか、上益城郡内の他手永や阿蘇郡の富裕層、藩士からも借財などを調達
- ・ 通潤橋のたもとの石碑「通潤橋建築中勉勤之銘」【図2】：参加の石工・土木技術者の出身地【表3】が判明
→種山石工12名のほか、藩領の広範囲から、あるいは幕領天草からも、多くの石工が参加
→石工集団の広域ネットワークとともに、領国地域社会を単位に、手永が技術協力を行った可能性が大
- ・ 幕末期、惣庄屋と地元の石工の関係は密接。彼らが郡や手永をこえて技術指導を行う事例も多く存在
→安政4年(1857)8月、布田保之助・佐野市郎右衛門と石工卯市は豊後野津原手永の目鑑橋建設を指導
→通潤橋建設には野津原からも石工(喜太郎)が参加。その返礼として布田・佐野・卯市が出向いたか
- ・ 熊本藩の惣庄屋たちは定期的に集会し相互に交流。彼らの意見書が藩政を動かすこともしばしば
→彼らのヨコのつながりが、領国地域社会を単位とした技術交流を活性化=通潤橋建設の重要な前提に

◇ 小括

- ・ 幕末期、百姓層が運営する手永制により通潤橋建設が遂行された背景には、充実した行財政組織とともに、近世城郭の石垣築造を含む専門技術までを手永が有した点、そうした技術に裏付けられたインフラ事業が、惣庄屋たちの相互交流を経て、藩領全体で行われていた点が存在

おわりに

◇ まとめ——通潤橋が有する「文化史的意義」

- ・ 通潤橋とは、地域社会がインフラ事業を牽引した18-19世紀、卓越した事業遂行能力と技術力を有した幕末期の手永役人が、石工集団とともに、領国地域社会の協力のもと創出した、江戸時代の石橋の最高傑作
→江戸時代の社会変容とともに、地域社会主導によるインフラ事業の到達点を示す極めて意義深い文化財

¹ 当時の公定相場で換算すると、金約7,839.9両。これを現在のそば代金で換算すると、約12億4,000円になる(『重要文化財通潤橋総合調査報告書』80頁)

- ＊ 明治維新後、手永役人たちは議員や区町村吏として活躍。新紙幣となる北里柴三郎も手永役人の長男
- ・ 但し、手永制のように充実した行財政・自治機能を保証する分権的システムは、明治維新によって途絶
- 通潤橋建設は、日本史のなかでも、幕末期という特有の時期に、熊本藩領ゆえ実現可能となったもの
- ◇ **通潤橋の歴史が現代に放つメッセージ**
- ・ 決して地域を取り残さない行政、私利私欲を超えた行政役人の公共的精神、未来を長期的に見据えた姿勢（災害対応含む）、地方自治の充実を重んじた国家、通潤用水を守り続けるコミュニティの力、など
- 地方が苦境にある現代だからこそ重要性を増す通潤橋の歴史。それを守り、発信していくことが重要

参考文献

- ・ 稲葉継陽・今村直樹編『日本近世の領国地域社会』（吉川弘文館、2015年）
- ・ 今村直樹『近世の地域行財政と明治維新』（吉川弘文館、2020年）
- ・ 今村直樹「地域史からみた北里柴三郎」（『永青文庫研究』6、2023年）
- ・ 今村直樹「近世後期藩領国の用水管理と地域社会」（『永青文庫研究』7、2024年3月刊行予定）
- ・ 北垣聰一郎「近世城郭石垣における勾配のノリとソリについて」（小和田哲男先生古稀記念論集刊行会編『戦国武将と城』サンライズ出版、2014年）
- ・ 北河大次郎「通潤橋の国宝指定」（『橋梁と基礎』58-1、2024年）
- ・ 広瀬伸「農業用水施設と文化財」（『土地改良』323、2023年）
- ・ 深尾京司・中村尚史・中林真幸編『岩波講座 日本経済の歴史 第2巻 近世』（岩波書店、2017年）
- ・ 山尾敏孝「九州の石橋の架設と構造特性及び通潤橋の特徴」（『月刊文化財』721、2023年）
- ・ 吉村豊雄『日本近世の行政と地域社会』（校倉書房、2013年）
- ・ 吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編『熊本藩の地域社会と行政』（思文閣出版、2009年）
- ・ 『重要文化財 通潤橋総合調査報告書』（山都町教育委員会、2023年）

≪付記≫

本講演資料の作成にあたり、山都町教育委員会の大津山恭子氏に大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

永青文庫研究センター年報

第15号 (2023年度)

発行日：2024年3月31日

発行者：熊本大学永青文庫研究センター

〒860-8555

熊本市中央区黒髪2-40-1

TEL 096-342-2304

印刷所：シモダ印刷株式会社